

都留文科大学報

第115号

2011年
3月22日(火)

編集 都留文科大学広報委員会

〒402-8555 山梨県都留市田原 3-8-1 都留文科大学内

☎ 0554-43-4341 URL: <http://tsuru.ac.jp/>



合唱団2年連続全国合唱コンクール金賞受賞



都留市地産地消レシピを開発



卒業展覧会



中国・広州アジア大会で本学事務職員佐野さん銅メダル獲得

巻頭特集

「さよなら文大」退職教員から 2

去るにあたって思うこと 山本安夫教授
高校訪問からの贈り物 吉住典子准教授
都留文科大学の思い出とともに 加藤静子教授
都留での6年間を振り返って 濱谷エロイス教授

おくることば・旅立つことば 6

初等教育学科 西本勝美教授／国文学科 牛山 恵教授
英文学科 窪田憲子教授／社会学科 高田 研教授
比較文化学科 伊香俊哉教授／社会学科 畑 潤教授
初等教育学科 川瀬那梨加／国文学科 新 祥子
英文学科 大谷将也／社会学科 宮地さくら
社会学科 神谷 彩／比較文化学科 舟津良介
文学専攻科教育学専攻 西村知穂

大学院文学研究科

国文学専攻 渡邊 愛
社会学地域社会研究専攻 相沢翔平
英語英米文学専攻 井上舞子
比較文化専攻 曾 琴
臨床教育実践学専攻 志村麻奈美

卒業論文・研究論文・修士論文一覧 18

初等教育学科・国文学科・英文学科
社会学科 (現代社会専攻／環境・コミュニティ創造専攻)
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

講演会だより 32

地域交流研究フォーラム
社会学科・地域社会学会共催 2010 年度後期講演会
比較文化学科・比較文化学会共催 講演会
大学院文学研究科 英語英米文学専攻主催 講演会
大学院文学研究科主催 講演会

ホームページリニューアル 38

文大だより 40

卒業演奏会を終えて／卒業制作展を終えて
都留文科大学音楽教室コンサートシリーズNo. 26
山梨の魅力メッセンジャー 27 名に認定証交付
生活環境学ゼミ 都留市地産地消レシピを開発
編集後記…中地 幸
「学生チャレンジプロジェクト」による大学紹介 DVD 完成
都留文科大学出版援助金による出版書籍紹介
本 ぶんだい堂 44

さよなら文大 — 4 教員が退職

今年の3月で初等教育学科山本安夫教授、吉住典子准教授、国文学科加藤静子教授、英文学科濱谷エロイス教授の4教員が惜しまれながら定年退職となります。ここでは本学の発展のためにご尽力くださったこの4名の方々に本学での思い出を語ってもらいました。

去るにあたって思うこと

初等教育学科教授 山本安夫

1977年から本学の教員として34年間を過しました。振り返ってみて、何も変わっていないと思うことは多々ありますが、革命的变化を感じることもあります（特に科学技術関係では）。身近なことでは何といっても情報通信技術の進歩でしょう。私の研究上の仕事は、もっぱら電子計算機による数値計算に基づいています。本学に着任したころは東大の大型計算機センターを利用するしかありませんでした。時間と交通費を費やして本郷まで出向いても数本のジョブが流せるだけ、出講日にはそれも不可能、本格的計算をやれば計算機使用料で個人研究費はふっとぶ、研究が続けられるか暗澹たる思いでした。現在はと云えば、ノートパソコンの計算能力ですら当時の超大型計算機の能力をはるかに超えています。都留にいても、自宅でも、



電車の中でも、おもむくままに計算ができます、計算費を気にすることもなく。昔なら一か月を要した仕事が1日とか1時間の単位でできてしまいます。

スケールの大きい革命的变化と云えば、宇宙論が実証的科学になったことでしょうか。34年前と云えば、宇宙背景放射の発見から十数年、ビッグバン仮説が定説として確立した頃でした。観測技術の発展がもたらしたその後の発見の連続はまさに驚異的でした。ハッブル宇宙望遠鏡や宇宙背景放射観測衛星による観測によって、我々の宇宙に関する三つの基本的パラメーター（ハッブル定数、物質密度、ダークエネルギーの密度）が決定され、これらの値から年齢 137 ± 2 億年であることが求められています。宇宙が開始後 10^{-36} 秒における指数関数的加速膨張（インフレーション）によって巨大化したという驚くべきシナリオは実証的根拠の上に定着しています。そして10年ほど前から、宇宙は宇宙斥力（ダークエネルギー）によって加速膨張（第二のインフレーション）していることが観測事実として明らかになっています。私にはすべて想像を絶することばかりでした。

写真は、冬のプラハで見つけたティコ・ブラーエとケプラーの像とのお気に入りのショット



山本安夫教授

です。ティコ・ブラーエは生涯をかけて惑星の運行記録を蓄積しました。弟子のケプラーは、その記録を基に、幾何学を駆使した解析によって火星の軌道が楕円であることを見出しました。二人による科学の典型的2段階です。そしてニュートンの法則による楕円軌道の必然性の証明が第3段階にあたるわけです。二人の像は、それぞれ四分儀と望遠鏡を携えて、はるか彼方を見据えています——我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか——私の心にふとこの根源的な問いかけが浮かび上がります。我々はいま「科学の言葉」でこの問いかけに答えることができます。本学は「人間探求の大学」と言われてきました。絶えず発展する科学は絶えず人間の自然観・宇宙観を革新し続けます。人間探求において、教育において、そして今後の本学の在り方において、科学が正しく深く位置づけられることを願ってやみません。

「さよなら文大」 退職教員 4 名から

高校訪問からの贈り物

初等教育学科准教授 吉住典子

38年ほどの長きに亘り文大にお世話になりました。思い出はたくさんありますが、その中でも、特記すべきことは高校訪問です。10年前に入試管理委員になり、それまでやったことのない大学説明会への参加や高校訪問をすることになりました。その後、10年間入試関係の委員を務め、訪問した高校は延べ 300校位にはなるだろうと思います。最初は大変で入学案内は見たこともないし、何をしたら良いかも分かりません。幸いなことに、当時委員長であった副学長の高田先生の提案で、現在副学長の福田先生と一緒に大学説明会に参加することになり、京都や岡山など3カ所を2人で出張しました。私は一言もしゃべらず、傍で大学案内などを渡すだけでした。そこで説明の仕方の一部を学習し、その後高校訪問に立ちました。最初の頃の高校訪問では初教のことだけしか分かりませんでしたので、他学科について質問があれば、必ず大学に持ち帰ってその学科の入試委員に返答してもらうというスタンスをとりました。もちろん、日本中の高校に行ったわけではありません。前年度に行ったところの方が何となく雰囲気は分かるし昨年度も訪問したという馴れもあります。ということで6回くらい訪問した高校もありま

す。高校訪問で会得したのは、先生方の文大に対する高い評価です。長野の高校で開催された大学説明会に参加することがありました。高校一年生対象でしたが、70名ほどを相手に2回の大学説明をしました。そこでの都留文科大学の知名度は非常に低く2名ほどでした。その後、受験になると、推薦で8名～10名、中期でさらに、10名ほど受験者があるのです。これは高校の先生方のおかげとしかいいようがありません。訪問しても文大に対して非常に良い印象を持たれていることが多いのです。さらに、卒業生が高校の教師になっている場合には、その先生に憧れて文大を受験したいという生徒がいるという話を聞くと卒業生は宝だという思いが強くなりました。ある新潟県の高校では、「昨年推薦入試で合格した生徒は、高校の先生も文大の卒業生がいるし、思い出してみたら中学校の先生も文大出身の先生だった。というので、是非受験したいという人でした。今年はこんな良い生徒はおりません」ということをいわれました。その後、数年経ったらまた、受験生を送ってくれました。文大生は自分の力だけで受験するのではなく、環境のおかげという面が非常に強いのだと感じます。おもしろく思うのが、地方によってか



吉住典子准教授

なり差があることも訪問することにより分かってきました。今年度初めて、徳島県の訪問にでかけました。受験生が非常に多い県です。理由を考えましたが分かりません。四国や近畿など近隣の他県に比べてダントツに多いのです。その高校に卒業生がいるかどうかを聞いてみましたが、まったく知りませんでした。「都留文大は有名ではないですか？」という返答だけです。歴史があるのかもしれませんが。この大学への評価で良いことを聞きますと、本当に力が出てきます。この訪問で元気の源をもらっているのは逆に私なのだと実感しています。今後も是非、高校訪問を続けたいと思っています。都留文科大学がいつまでも評価の高い大学でありますように！

2010年度
生活環境科学ゼミ生と一緒に

「さよなら文大」 退職教員 4 名から

都留文科大学の思い出とともに

国文学科教授 加藤静子

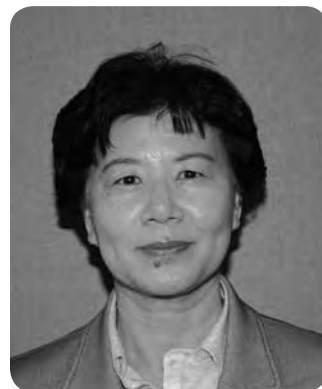
大学三年生のとき研究会に入会が許され、久保木哲夫先生（前学長）にお目にかかってから都留文科大学の思い出は始まります。すぐに文大の卒業生も参加されて、大学への好ましいイメージは私の中に定着していました。それが縁あって14年勤め退職の時を迎えた今、充実した幸せな時であったと、学生さんたちにまず感謝申し上げたい。

真摯に学ぶ姿勢があつて、かつ学ぶことの楽しさを知っている学生たちを相手に授業できるという、教師冥利につきる大学は決して多くはないからです。王朝文学研究会は、久保木先生から引き継ぎましたので、40数年続いたことになりました。授業などでは口にしない素朴な疑問や感想などが飛び出し、あまりに的を射ているときもあり、またいろいろなおしゃべりに転じるときもありと、それも楽しい時でした。日本文化史演習での京都旅行も、学生にじかに触れられ、都留気質をよく知るチャンスでした。卒論や修論の各自の問題意識につきあうべく、アンテナをはって様々に欲張り吸収できたのも楽しかった。同僚の先生も刺激的で、学生を育てる教育の場から研究に返ってることが多々あり、それも楽しかった。学外研修に加えて大学出版助成の交付という、

サポート体勢にも感謝しています。

かつて都留文科大学が受験競争率日本一とニュースになりましたが、専任として入って、教員一人ひとりがまさしく手作りで作りあげた大学なのだと、その理由の一端を知りました。学生と身近に接しているからこそ、実にやわらかくよりよい方向に発想し、教員同士も事務局の人々も作用しあって方向性を作り上げていく機動力は、確かなものでした。

最初の委員会は山本安夫先生が図書館長のとき、新図書館建設にも少し関わり、図書館員と教員とが、地方にまで出かけて建物・機能面や利用の実態にまで触れて調査し、建設やその後を射程に入れて実現化していく、それは最初の驚きでした。その後前任校にはなかった雑務が加わりましたが、末端の一教員であっても、気付いたことを発言しておけば、望ましい方向に動いていけると知り、実に可塑性に富む柔軟な大学組織と理解しました。年齢から私も国文学科主任や大学院専攻主任もやりました。学科では交代制、主任の時には少し高みに立って様々な問題点を知り判断も下す、構成員が順に体験することは、大学の諸々を知る場となって学科の発展も促します。よい時分の人材が



加藤静子教授

育って、大学中枢で活躍する道に通じました。委員会も衆知が結集できる体勢があり、責任所在もわかりました。

大学が法人化されてまだ時間を経っていないからでしょうか、現在は、進むべき方向性が見えにくく、教員たちを結集させていく求心力が行方不明に思われてなりません。学生も社会もすさまじい勢いで変化していく今、かつてのエネルギーに満ち求心力の漲る体勢が、一日もはやく誰の目にも見えるようになることを念じています。

日本文化史演習
京都・天龍寺にて

「さよなら文大」 退職教員 4 名から

都留での 6 年間を振り返って

英文学科教授 濱谷エロイス

I was only at Tsuru University for six years, and six years is not very long in terms of a career. But there are several aspects to my time at Tsuru that I will always cherish. The environment is one. By 'environment', I don't only mean the location in the mountains, but 'environment' also includes the people and the working conditions. I have experienced only kindness among the people I have worked with: the office staff who are always so patient and helpful even when I am late with some documents, my colleagues who have endured my ignorance and answered my questions with such forbearance. But the physical environment has also been lovely with the swallows in Spring which I have enjoyed watching from the window of my office, the vastness of the sky which is unusual in Japan but something that I miss of my own country, and the changing climate and weather all of which could be seen from windows. One thing I will not miss, however, is the snow, but that is inescapable in Japan anywhere outside of Tokyo. The drives each day through the mountains to and from Tsuru, even in the snow, have been a constant source of refreshment giving me a quiet moment in each day for reflection and planning.

There have also been my

research, teaching, and the students. I feel very fortunate that I was able to do research in areas of my interest: metacognitive second language learning strategies and second language listening. I spent several years with pilot studies before the final research where I found that, yes, it certainly is possible to change students' attributions for success or failure for their vocabulary learning and to change their approach to and use of strategies for learning second language vocabulary. The work I did this last year on the problems first year non-English majors experience in an English classroom when the language of instruction is English revealed several important sources of difficulties. The results have implications for the introduction of more English in the English classroom from 2013. And I will continue with research in this area in the coming years. This listening research was carried out with the help of many of the students in my two seminars on English Education. They helped identify problems they have experienced in listening to oral English through out their educational experience. Their advice and help were invaluable to the work during all of the data collection and analysis. They were in on the results as they appeared, and we discussed the implications of those results for the English



濱谷エロイス教授

classroom and teaching.

Although there are many wonderful aspects to my time at Tsuru, the students have been the real high point. They are young people who accept challenges and realize there are more challenges ahead and are ready to face them. They are enthusiastic to learn and eager to help each other. They are very active; certainly there is nothing passive about them. They are also kind, generous and open. In short, they are great people with whom I feel privileged to have had the opportunity to work with. I sometimes feel very discouraged when I see how my generation has managed the world, but I am more positive about the future when these young people take charge.

Finally, my six years have been very short, but I would like to thank all the people who have so generously given of their time and energy on my behalf, and there are many. I truly appreciate all the kindness and great patience that has been shown me during my time at Tsuru.

おくることば・旅立つ言葉

教員から・卒業生から・修了生から

社会の創り手となる みなさんへ



初等教育学科教授
西本勝美

卒業おめでとう。大学を去るみなさんに、三つのことをお伝えして、送る言葉したいと思います。

一つ目は、他者（大人も子どもも）にたいして「誠実」に接して行ってほしいということです。誠実であれば、仲間は必ず現れます。

二つ目は、自分の「信念」を持続してほしいということです。そして、信念を持つためには、「誰にとって、何が大事か」を、自分の頭で考え続けなければなりません。しかも、その信念は、独り善がりのものであってはならないと思います。信念の根拠を問い続けるとともに、他者の信念や考えと積極的に交流し、自分の信念を鍛え上げていくことが大事です。

三つ目は、「批判的精神」を持続してほしいということです。みなさんは大学という「学問の自由」の場で4年間学びました。授業を受けるなかでも、鋭く対立する見解や、簡単には両立しない立場

の違いに触れてきたはずで
す。また、どうしても納得で
きない見解もあったでしょ
う。そうした多様な見解や主
張に接して悩み、苦しむこと
こそが、大学に通った一番の
値打ちです。そして、とりわ
け大事なことは、自分を含む社
会が、大きな力や得体の知れ
ない力によって流れていると
きに、ただ流され
るのではなく、踏
みとどまって、「誰
にとって、何が大事か」を考
えることです。それが批判
的精神です。

社会の現状はす
ぐに変えられるよ
うなものではあり
ません。しかし、
簡単には変えられ

ない現状にあっても、自分の
頭で考え、鍛え上げた信念が
あれば、現状の受け止めと自
分の活動に余裕が生まれ、誠
実さと相まって仲間を増やし
ていくことができます。

これからの社会を担い、
創っていく主体はみなさんで
す。どうかお元気で。



笛吹市芦川町での地質調査実習

自由に生きよ



国文学科教授
牛山 恵

卒業おめでとう。自立の日
を迎えたあなたがたに、私の
思いを伝えよう。

私は自分の人生を悔いたこ
とはない。それは、その時そ
の時、できることを精一杯
やってきたという思いがある

からだ。しかし、かつて、同
僚のA先生のお嬢さんの話を
聞いたとき、自分の人生はこ
れでよかったのかと寂しい思
いで過去を振り返ったことが
ある。

A先生のお嬢さんは、フラ
ンスやアフリカに出かけ、自
分のやりたいことを貫いてい
るとうかがった。振り返れば、
私自身は、やりたいことをや
るというより、やらなければ
ならないことをやるという生
き方であった。極めて頑健と
いうわけでもなかったし、女

卒業生におくることば

シェイクスピアの綴り

英文学科教授
窪田憲子

皆さんご卒業おめでとうございます。今の皆さんの心境はどのようなものでしょう。期待のときめきでしょうか、行く手への不安でしょうか、あるいは特に感慨なしでしょうか。人それぞれの思いを胸に秘めていると思いますが、ひとつだけ言えることは、今までに何回も卒業を経験してきた小中高校での卒業と、大学を卒業することは、まったく違う意味をもっているということです。小中高校での卒業では、次に待っている世界は同じ勉学という世界でした。場所が故郷から都留に移っても、〈学ぶ〉という目的は変わりませんでした。

しかし、大学を卒業することは、勉学が基盤の生活から〈仕事〉が基盤の生活に変わることです。〈仕事〉とは大体において、いつもまく行くとは限りません。大学生になって〈勉強〉の世界では頂点を極めた皆さんも、〈仕事〉の場ではまた一からのリスタートが待っています。アルバイトで経験した仕事の苦しさとは違うつらさ・苦しさがあると思います。

私は授業で英文学史を教えるときは、事あるごとに、「英文科で学ぶ皆さんは、Shakespeare の綴りを絶対間違わないように。最後の“e”を抜かすことが絶対ないように」と言ってきました。皆さんは、社会に出たらおそらく「シェイクスピアの綴りを正しく書いても間違っている、自分の仕事にはまったく関係ないよ」と思われることでしょう。もしかしたら、そんな役にも立たないことに

エネルギーを使わされていたのか、と嘆くかもしれません。しかし、シェイクスピアの綴りは単なる綴りではないのです。どんなことも基本が大切だということを意味しているのです。

〈仕事〉の世界というまったく新しい場に飛び込んでも、そこで充実したおもしろい人生を送るためには、今までの〈勉強〉の世界の基本理念がいかに重要であるのか、早晩わかることでしょう。今まで大学の4年間でしてきたように、確固とした基本の上に立って、探求する対象にどうアプローチしていくのか考える時に、仕事の道も開けてきます。大学で体得した基本の修得と洞察力をたずさえて、さっそうと〈仕事〉の世界に飛び込んでいってください。

性の自由はまだまだ限定されている時代であったし、決して豊かな暮らしではなかったし、3人兄弟の長女であるということもあった。勇気と余裕がなかったのである。夢は世界を旅することであった。「海のあなたのはるけき国へ」という詩のフレーズがいつも私にささやきかけていた。もちろん、私の夢はこれからゆっくりかなえていくことができる。しかし、やはり若いときにこそ、自分の夢をかなえるような生き方をしたかった

たのである。

進路に関して学生の話聞く度に、郷里や家族に縛られ、広い世界を見ることができないでいることを残念に思う。父親でも母親でもなく、自分自身の幸せを、真っ先に考えていいのだと言いたくなる。21世紀の今日、私の時代よりもはるかに、生き方の多様性は認められるはずだ。自由に生きよ。都留文科大学で学び、都留文科大学を卒業するということで、十分に堅実な青春時代を送ったではな

いか。ここからは、大人として責任ある生き方をしなければいけないのは当然だが、教員であろうとサラリーマンであろうと、やりたいことを見つけて精一杯やる、そういう生き方をしたい。50年後に、「いい人生だった。おもしろかった。」と言えるように。

卒業生におくることば

環境・コミュニティ創造
専攻一期生の皆さんへ

社会学科
環境・コミュニティ
創造専攻教授

高田 研

ご卒業おめでとうございます。4年前の河口湖のオリエンテーション合宿では皆さんに、1期生としての使命観と誇りを持って大学生活を過ごしてほしいという期待を託しました。1年生ではバスを使つての市内でのフィールド体験に始まり、山梨のローカルテレビで放映された「つる弁」、桂川の生物調査、有機栽培など地域をテーマにした様々なプロジェクトを立ち上げて様々なチャレンジが始まりました。

また文科省の環境GPも並行してスタートし、泉先生との森づくりや、田中先生との農園、そして私とは地域カフェやキャンプ、小屋づくりを実践してまいりました。

環境GPに留まる事なく、学生の自主活動として、環境を考えるサークル「グリーン」や、環境教育を行う「グローバルワイルドライフGWL」農業をおこなうさまざまな自主サークルも専攻を越えて誕生しました。

3年生では北海道から沖縄まで、全国の企業、NPO、自治体など環境関連団体、又はセクションへのインターンシッ

プも初めての試みでした。皆さんのインターン先での高い評価が2期3期生の礎となりました。

また、グラントワーク三島で活躍されている渡辺先生をお迎えし

て、専攻スタッフが勢揃いし、地域プロジェクトもバイオカモ復元やや水掛菜の商品開発等、卒業を前にした今も尚忙しく動いています。

就職戦線では厳しい社会情勢の中、苦しい戦いを強いられました。しかし今ここで「地域にこそ環境持続性の鍵がある。」というミッションに立



学生たちと協力し完成したソーハウス

ち戻り、グローバルマナーを求める経済構造の外側に芽生えた新しい息吹を見つけることこそ本専攻の使命とするならば、この逆境の中にこそその契機があると考えます。

日本の各地に舞い散って発芽する種子となり、やがては大木となれんことを我々教員一同は期待しております。

人生、これから！



比較文化学科教授

伊香俊哉

今、卒業を迎えるにあたって、皆さんが一番気にかかる、あるいは気にかかった言葉は「就職」ではないでしょうか。大学を出ることが、人生の大きな節目であることは間違いありません。とりわけリーマン・ショック以降どん底へと向かいっぱなしの就職状況に身を置いていれば、有名企業や公務員という「いい

就職」ができたかどうかというのは、人生の成功の分かれ道であると考えても不思議なことではないし、そうした就職を「成功」と捉えることが誤りではないでしょう。

しかし、「いい就職」だけが人生の成功や幸福を決定するものではないことも信じてもらいたと思います。有名大学を出て、キャリアとなったエリートが権力犯罪に走って身を滅ぼし、晩節を汚すこともあります。「いい就職」先で、過労やストレス、人間関係などなどで身も心もボロボロになるとか、仕事には恵まれても個人的な幸せには恵まれな

卒業生におくることば

自分の精神を働かせよう
—大学院修了者へ贈ることば—社会学科教授
畑 潤

本学大学院を修了されたみなさんに、その探究に寄り添った者として祝意を表したいと思います。大学院生活の二年間というのは、ほんとうに短かったことでしょう。しかし修士論文執筆ということを求心点にし、探究という営みに関わって、多くのことがらを経験されたのではないのでしょうか。そして研究の「対象」に向かいながら、対象に向かう

「自己」自身の姿をも意識させられたのではないのでしょうか。

私も、若い院生諸君と探究の時間を共にしながら、さまざまなことを思い出し、また考えました。その一つに“他者の評価”（他者による評価）ということがあります。とくに若いときには、一面において自負心（自存の心理）がたやすく働くのですが、多面では、権威ある存在に認められたいという願望（依存の心理）に囚われるものです。私たちの仕事は、私たち自身の存在自体も、社会的ですから、根底において他者の評価・批評（つまり相通ずること）は大事な意味をもっています。しかし、他者の

“拍手”の心地よさというものに対しては、警戒心をもたなければなりません。たとえば、学界のオーソリティの褒め言葉に囚われて、小さく固まってしまった（ように観察された）研究仲間を、少なからず見てきたような気がします。

自分として、どのような探究世界を求めていくかは、油断ならないものがあるようです。とくに孤独を恐れないということは、クリエイティヴな心の構えとして、辛抱強さをもって意識される必要があると思います。古典（古代ギリシアの文芸・思想はその淵源）は、この孤独となることの意味を（人間の絆というものを、つまり妥協されるべきではない人間のテーマを）、深くゆたかに考えさせてくれるのです。

探究の営みというものの根には、それぞれに研究領域・対象は異なっていますが、この、ほんとうに自分の精神を働かせるということ、試行錯誤しながら創意・工夫を積み重ねていくということがあるように思います。このような探究における真実さを共有しあうことによって、社会の文化は少し生命力を回復するのだと思います。

これからもお互いに、古典との対話を忘れずに、自分の精神を働かせる訓練を積んでいきましょう。

いとかもあるでしょう。これから先に何が待っているのかなんてわからないものだと思います。楽な人生なんてそうそう転がっているものではありません。人生は苦勞や困難に満ちていま

す。その中で自分の幸せの基準をきっちり打ち立てて、最終的にその基準をクリアできる人生を送れることが大事のように思います。人生はこれからが勝負。



旅立つことば 卒業生から

楽しく活動的に
生きたいと思った原点初等教育学科4年
川瀬那梨加

私の大学生活の転換点は、大学のプログラムで行ったカナダ短期留学です。たった1ヵ月間でしたが日本に帰ってきてても留学中の感覚が忘れられず、悩んだ末、この機を逃すと絶対に後悔すると思い、2年生の冬に再びカナダへの留学を決めました。成田でのトラブルの数々と、乗り継ぎ先のバンクーバーで大きなスーツケースを2つ引き、泣きそうになりながらゲートを探し回ったのを今でもはっきりと覚えています。ホストマザーに会った時に感じた、大冒険を終えた安心感と達成感は忘れられません。

カナダでは朝起きてから寝るまでが全て勉強でした。英語はもちろん、様々な文化や人に触れ合ったり、人々の考えに触れたり、今までの私の価値観が大きく変わる経験でした。その反面、独りになりたくなったり、自身の英語への無知さに打ちひしがれることもありました。それを超えられたのは、今も定期的に会っているクラスメイトだった友人や、ホストマザーのおかげでした。彼女たちは私を常に笑わせ、多くのことを教え、彼女たちを通じて多

くの人と知り合わせてくれました。彼女たちの支えなしには、豊かな留学生活を送れませんでした。

ところが、当時はそれなりに頑張ったようであっても、今になって「もっとボランティアや学校訪問などをして人と関わればよかった」「もっと勉強する時間があつたはずなのに」と思うようになってきました。それは、日本の生活に慣れたからこそ、あの時間がどんなに大切でかけがえのない学びの機会に富んでいたのか気付いたからです。そして、その機会は日本での生活の中にも溢れていることも。

今が完璧と満足するのではなく、自分の考え次第で状況はいくらでも変わります。そのことを意識して、私はこれから人とつながり、学び続けていこうと思います。そして、そのような姿を、教師としてもそうですが、1人の身近な大人として子どもたちに見せ続けられるようになりたいと考えています。



E S L 3クラス集合写真 in Canada

「感謝の言葉」

国文学科4年
新 祥子

都留での最後の春を迎えようとしている今、あっという間の四年間だったとしみじみ感じています。慣れない土地での暮らしに多くの不安を抱いていた一年生の頃と比べると、少しは大人になった気もしますが、それでも未熟な部分は尽きません。

大学生活を振り返って強く思うのは、阿毛ゼミの一員で良かったということです。ゼミで過ごした二年間は、沢山

の刺激を与えて貰いました。興味のある問題を、どこまで掘り下げて考えられるか。また、考えたことをどれだけ形に出来るか。決められた道がない分、卒業論文は自分に対する挑戦でもあり、それに対し、人からの批評が受けられる場というのがゼミでした。自分の考察に真摯に向き合って貰える環境というのは、そう得られるものではないと思います。

単に考えを文章化するだけでなく、説得性を持たせた上で簡潔に伝えることは、容易ではありません。論文を作成しながら、自身の力不足に煩悶する日々が続きました。しかし、いつもの確な糸口を示唆して下さる阿毛先生と、共

旅立つことば 卒業生から

大学生活の振り返りと
これからの生活に向けて英文学科4年
大谷将也

大学に入学してから今日までの4年間は非常に充実した生活であったと思う。その理由の1つとして、他の都道府県の人たちと友好関係を築くことができたことが挙げられる。全国各地から学生が集まるということもあり、様々な背景を持つ人と知り合い交流する機会が増えた。私自身は地元山梨の出身であるが、今まで知ることのなかった地域

に悩み励まし合えるゼミの仲間たちがいたからこそ、自分自身と向き合い、卒業論文を完成させることが出来たと思っています。

ゼミに限らず、この4年間は本当に人に恵まれました。いつも温かく迎え入れてくれたバイト先の人々。時に厳しい言葉と共に、大切なことを幾つも教えてくれた部活の仲間たち。

都留での出会いは、自分にとって掛け替えのない宝物です。また、地元を離れて生活してみたことで、家族や友人の存在

の話を聞いたり実際に行ってみたりしたことで、貴重な時間を過ごすことができた。

上記に関連するが、4年間の生活の中で初めて経験したことが2つある。それは初めての海外訪問と個別指導塾でのアルバイトである。前者に関してであるが、英文学科主催の語学研修でオーストラリアを訪れ、自国とは違う風習や文化を学ぶことができた。また、現地の家庭で生活することで、日本では知りえなかったオーストラリアの社会事情を知ることでもできた。その意味で、初めての海外経験は自分の中で大きな糧となった。後者に関しては、地元の中学生や高校生の指導をする中で生徒に対する気配りを意

の大きさというものを再確認しました。今まで見えていなかった沢山の人の支えに気づき、その支えあって今の自分があるのだと、改めて感謝しています。

住み慣れた都留を離れ、春からはまた新しい土地での生活が始まります。四年前と同じく不安はありますが、今まで支えて貰った分、今度は

自分が誰かを支えられるよう、新社会人として成長していきたいです。四年間、本当に有難うございました。



識したことで、配慮を持って物事に取り組む力が今まで以上に磨かれたと感じている。また、他の講師がどのような考えを持って指導にあたっているのかを知ること、自己の指導方法を修正してより効果が出る指導法を考える基盤が構築されたと感じている。前述した2つの経験をこれからの生活で何らかの形で活かしていきたいと考えている。

今年の4月からいよいよ社会人として社会に出ることになる。新しい環境で新しい出会いが待っているという期待を持っているが、初めてのことで不安を感じている。

しかし、あまり1つの見方にこだわりすぎず、広く視点を持っていけば徐々に慣れてくるのではないかと気持ちで物事に当たっていきたい。これからの生活は決して平坦な道ではないかもしれないが、諦めることなく自分の道を作っていきたい。



阿毛ゼミでの夏合宿

旅立つことば 卒業生から

「社会」への旅立ち



社会学科
現代社会専攻 4年
宮地さくら

出会いと別れの春。切ない季節でもあります。新たなスタートをきるこの季節が私は大好きです。4年前初めて都留にやって来たときと同じように、都留を旅立とうとしている今、期待と不安でいっぱいな気持ちがこの季節の訪れをより強く感じさせます。

都留で過ごした日々はかけがえのないものであり、多くの人たちに出会えたことは私の財産です。サークル仲間との間で“つるかぞ（都留の家族）”という言葉をよく使いますが、まさにここは第二の故郷です。この4年間、平和活動に力を注いだり子どもたちとキャンプをしたり、また、米作りや養豚場のバイト、北海道での農業と本当に多くの経験をしました。大学で多角的、総合的に社会を学ぶとともに、都留だからこそのできる経験や大学生だからこそのできる様々な経験を積むなかで、幅広い視野で「社会」をとらえられるようになり、社会への関心はますます大きくなったと感じます。

所属する現代社会論ゼミでは、「格差社会」に象徴される労働の問題や現代の若者の意識や価値観等々、社会に関する知識や思考を深めてきま

した。そして、最後のゼミでは「社会」というテーマで議論しました。「社会的」という言葉の起源や意味、国や時代によるニュアンスの違いなど、「社会的なもの」とはどういったものなのか深く考えさせられました。

その中で、“こうあってほしいと願う社会を一人ひとりが創っていくことができる。それぞれの道で、社会にできることをやっていってください”という進藤先生のメッセージが強く胸に響きました。これまで学び経験したことを糧に、いよいよ「社会」に出て行くのだと実感したのです。



卒業後は小学生の頃からの夢であった消防官として働きますが、これからも学び続け、先生の言葉を胸に微力ながらも社会に貢献していきたい、社会を創っていきたくと思っています。そして、お世話になった方々や先生、仲間たちに会いにまた都留を訪れたいと思います。

ここでしかできないこと、 ここだからできたこと。



社会学科
環境コミュニティ
創造専攻 4年
神谷 彩

“人との出会い”

私の大学生活は、その素晴らしいさと不思議さで溢れた4年間だった。

入学当初、なんの不自由もない都会で育った私にとって、都留は決して居心地がよく住みやすい環境というわけではなかった。しかし、ゼミや授業、都留市十日市場の伝統野菜“水掛菜”を育てる活動を通して大学内外の人と関

わる中で、その思いは徐々に変化していった。畑の真ん中で仲間と一緒に騒いだことも道行く人と笑顔が交換し合えるようになったこと、自分たちでつくった野菜で地域住民と一緒に食卓を囲むことなど一見当たり前にみえる日常生活から、命を支える農と食のこと、人との関わりの中で生きていくこと、住んでいるまちについて知る大切さを見つめ直すことができた。そして、その全ての時間が私にとって何事にも変えられない貴重な時間となり、物的に便利で満たされた暮らし方ではなく、豊かさとはなんであるのか、これからどんな生き方をしていきたいのか、自分自身としっかり向き合うきつ

旅立つことば 卒業生から

旅立つことば



比較文化学科 4 年
舟津良介

都留文科大学に入学して早四年。この四年間は本当にあっという間と思えるほどに充実していました。

私は都留文科大学に入るにあたって一つの目標がありました。それは「中国へ留学する」ことです。元々、父の仕事の都合で中国と接する機会が多く、興味をもっていたが、都留文科大学では中国への留学プログラムがあるということで、是非とも行きた

いと思っていました。そして実際に二年生の夏休みには古都西安にある陝西師範大学に一カ月、三年生の時には湖南省長沙市にある湖南師範大学に一年間留学しました。そこで私は中国語の上達のみならず、多くの中国人や韓国、インドネシアな

ど多くの国の人たちと交流し、本当に貴重な時間を過ごすことができました。しかし、何度かお互いの歴史認識のずれを感じることもあり、そのたびに私は自分の知識の浅さを後悔しました。帰国後に私は笠原十九司先生のゼミに所属し、東アジアの近現代史を学び、東アジアが今後共存し



湖南師範大学にてクラスメートと

ていくうえでどのような視点が必要かについて深く考えることができました。私は留学していた関係で一年間しか笠原先生から直接学ぶことができなかったのですが、留学中に何度かメールでためになる助言をいただき、帰国後も卒業論文の指導や進路に関する相談など本当にお世話になりました。また、5月には山梨平和ミュージアムで開催された日中歴史認識に関する講演会に参加させていただき、日中相互理解への課題や展望について意見を交わし、非常に有意義な時間を過ごすことができました。

私は卒業後、中国語教師になるために中国の大学院に進学し、そこで専門的な勉強をしたいと考えています。その際には色々な困難が待ち受けていると思いますが、都留文科大学で得た経験を糧に、あきらめず前に進んでいきたいと思っています。最後に、今の私があるのも都留文科大学の教職員をはじめとする多くの方々のおかげであり、深く感謝しています。皆さん、本当にありがとうございました。

かけとなっていった。

また、学生から社会人になるために何かを選択しなければならぬ時、自分を人と比べるのではなく、自分の気持ちに正直になり、今できることを精一杯やることで必ず道は開けるといふことを身をもって体感した。この先訪れるだろう様々な困難に対して、“自分の心が感じるままに”前へ進む強さとその選択への責任をもてる人間で私はありたいと思う。

私は4月からまた新しい土地に移り住む。しかし、私を育て、支えてくれた都留という存在は、この先もずっと私にとっての一つのふるさと



であり続ける。
‘もっと多くの都留文科大学生に都留というまちに目を向け知ってほしい、地域住民の思いを感じてほしい、ここでしかできないことをして今を存分に楽しんでほしい…’そんな風に思う。

大学4年間を通して、国内外の本当にたくさんの方と出会い、お世話になった。その方たちをはじめとする文大で共に過ごした先生方や仲間たち、そして家族に対して今、心から感謝の気持ちを伝えたい。

旅立つことば 専攻科・修了生から

専攻科での1年



文学専攻科
教育学専攻
西村知穂

私が専攻科の受験を決めたのは、「自分で納得するまで学んでから教壇に立ちたい」という思いからでした。まだ自分には、教員になるためにやり残したことがあるのではないかと考えたのです。非常勤講師をしながら学ぶことも視野にありましたが、できるだけ学ぶことだけに打ち込みたい、そしてより実践的に学びたいという希望を叶えてくれるのが専攻科でした。

専攻科は定員が10人前後ということもあり、基本的な授業は全てゼミ形式で行われています。所属する学生全員に発言のチャンスがあり、先生方から直接その場でアドバイスを頂ける環境は、他の大学にはない素晴らしいものであったと実感しています。

集団討論や小論文の作成等、教員採用試験に直結した対策も充実していました。このような授業は単に試験対策で終わるのではなく、普段から自分の教育観を研ぎ澄まし、誰かに伝えていくという点でも有効です。授業案一つを取っても、専攻生によって様々な授業方法を提示してもらえることは、自らの視野を広げるのに大いに役立ちました。

専攻科に在籍していた1年間は、毎日が新しい発見に溢れていました。たった8人しかいないのに、こんなにもいろんな考えや知恵が存在していること…驚きを通り越して感動を感じる日々でした。そして、8

人で話し合った先にはもっと新しい発見があるという、知的好奇心が刺激される贅沢はちょっと他では味わえません。

授業によっては、フィールドワークに出かけたり宿泊研修を行ったりするものもあります。人数の少なさを活かしてレクリエーションも行って



専攻科内のレクリエーションパーティの様子。
誕生日の学生を全員でお祝いしました。

いました。絆を深めることで、よりお互いを高め合うことができたと感じています。

月並みな言葉ですが、専攻科には「助けあって学ぶ」理想の形がありました。この1年を活かし、今後は子どもと共に学び続ける教師であるために、努力を惜しまない所存です。

都留文科大学での
二年間を終えて

大学院文学研究科
国文学専攻
渡邊 愛

私が都留という美しい響きの地名を名に持つこの大学の存在を知ったのは中学生の頃で、大学受験を控えた姉が大学案内を取り寄せていたためでした。そして学部生時代を地元の私大で過ごした私は、専攻していた学問をもっと深めたいと考えるようになり、不思議な縁を感じながら、この都留文科大学に国文学専攻

の大学院生として入学しました。

都留での二年間は新たな出会いの連続でした。文学研究の最先端に行く教授陣の講義に日々刺激を受け、今まで知らなかった研究分野や文学論に触れ、首都圏であることから多くは東京で開かれている研究会等に出向く機会もありました。学校でも外部でも、書籍等で名前を目にするのみであった研究者の方々を直接拝見しながらその研究成果を学び、内容はもとより学問というものは生き物だという感覚を肌で知ったように思います。研究室ではさまざまな意向や志を持った友人たちと学び合い、さらに年齢や立場、

旅立つことば 大学院修了生から

旅立つことば



社会学
地域社会研究専攻

相沢翔平

今まで、自分が出会った人の数は…と考えると検討も付きません。そしてその中でどれだけの人を憶えているのかと聞かれたら、本当に一握りの人しかいないと言えます。そんな私が大学院に入り、最も感じたことは「出会いの大切さ」です。

私は大学院にいる間に、研究などでたくさんの方所へ行き、そこでたくさんの方たちと出会いました。すべての出会いが刺激に溢れ、自分を成

長させてくれるものでした。特に研究のインタビューで出会った人々には大きな刺激を受けました。皆、それぞれがポリシーを持って仕事と向き合っていて、その姿は尊敬と憧れを抱かせ、そして目標になるものでした。またこれまでの人生を振り返れば、私に新しい気づきから自分が変わるきっかけを与えてくれたのも、自分の向かう先の標となったのも様々な人との出会いでした。

しかし今までたくさんの人と連絡先の交換や名刺交換などをし、つながりを作ろうとした中で、そのつながりをどれだけ大切にできていたでしょうか。出会いやそこから生まれるつながりは、自分から積極的に動かないとすぐに

細くなってしまう、やがて切れてしまうでしょう。これまでの人生を振り返ると、そんなことがたくさんあったように思われます。それに気づけたことが、私にとって大きな糧になると、今、確信しています。大学院で作れたつながりを、今まで大切にしてきたつながりも一緒に、これからも大事にしたいです。

これから仕事を通じていろいろな職種のたくさんの人と出会うことになるでしょう。その中で自分自身も誰かの刺激になれるような人間に成長します。そしてすべての出会いに感謝し、大切にできる人間になります。この目標を示すことを私の旅立ちの言葉に代えさせていただきます。

最後になりましたが、都留での7年という長い学生生活の中で、離れて暮らす家族や、大学の先生方、ゼミやサークルの仲間たち、バイト先の方々、たくさんの方に支えられ、お世話になりました。私を支えてくださいましたすべての人に心からお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

国籍の違う学友との交流という貴重な体験に新鮮な刺激を受けました。二年目には近隣の高校で非常勤講師もさせていただき、学生であり一方で教師でもあるという立場から、「学び」というものが人から人へ伝達されるということの重要性、難しさ、そして面白さについて考えさせられることばかりでした。

この二年間で学んだことは多くありますが、何かを学び（国文科の学生である私の場合、その一番は「言葉」というものです）自分のものにしていくということは、自らの世界の拡大であると同時に、目の前の世界を拓く道具を手にすることでもあるというこ

とを知りました。ここで教えていただいたことをさらに深め、おこがましいようですが少しでも社会に還元できるような人間になればと思います。そして熱心にご指導くださった担当教員の牛山恵先生を初めとする先生方、大学院生活をともに過ごし楽しく切磋琢磨し合った学友たちに、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。



島根県の海士町の「ふるさと環境ミーティング」のワークショップにて

旅立つことば 大学院修了生から

「一期一会」に感謝

英語英米文学専攻
井上舞子

私にとって都留の大学院生活を一言で表すならば、まさに「刺激に満ち溢れた日々」であったように思う。それは、素晴らしい先生や学友に囲まれ、恵まれた環境で多くを学ぶことが出来たからである。様々な年齢層が集まった大学院のメンバーたちは、皆それぞれに多彩な経歴を持ち、知識、経験豊かな人々であった。私たちは互いの研究分野に関することから、何気ない冗談や悩み事まで、何でも腹を割って話せるほど仲が良く、研究室は常に活気に満ち溢れていた。一昨年、皆で白州町へ小旅行したことや、

鹿留の河原でバーベキューをしたことなどは、生涯忘れることのできない懐かしい思い出である。そんな素晴らしい学友たちとともに、私は自分の研究分野である米文学をはじめ、英文学、インド文学、英語学など、竹島先生はじめ多くの先生方から教えを頂き、文学というものの奥深さや英語圏の魅力を再発見し、感動と刺激に満ち充実した研究生活を送ることが出来た。

また研究の傍ら、将来英語教師になるという夢の実現に向け、SAT（学習ボランティア）を通じ学校現場で実践を積み、夏の教員採用試験に向けて必死に勉強したことなどは自分にとって大きな自信となった。勿論、そこには自分ひとりの力だけではなく、多くの人々の支えがあってこそ乗り越えることが出来たのだと思う。改めて、今日にいた



るまで、支えてくれた多くの先生方、友人、家族に対して感謝の気持ちを伝えたい。

そして現在、刺激と感動に満ち溢れた日々はあっという間に過ぎ去り、都留での大学院生活も間もなく終わりを迎えようとしている。4月からは英語教師として、これまで多くの人々との出会いを通じて学んできたことを糧に、今後新たに出会う多くの生徒たちや地域の人々との「一期一会」を大切に、これから私なりに一歩一歩進んでいけたらと思う。

旅立ちの言葉

大学院文化研究科
比較文化専攻
曾 琴

一年間の交換留学生生活と二年間の都留文科大学大学院での研究生活はあっという間にすぎた。留学生でありながら、文大生である。しかし、文大生であるより、留学生という意識は私には強く持っていた。

なぜ自分にはそのような気持ちができるのかと二年目か

ら考え込んでいた。留学生だから、先生たちも学生たちも厳しいことは言わない。困ったことがあったら留学生担当の先生に相談したら、すぐに解決してくれる。自分も無意識の中でそれに甘えている。そうすることは当たり前のように慣れていく自分に気づき、苛立った。それで、文大生としての最後の一年間、自分が文大生であることに強く意識して、甘えずにやってきた。今、振り返って見れば、よかったと思っている。そして、後輩の留学生たちにも伝えたかった。留学生であるということ

に甘えないでほしい。

大学卒の人々より私は六年間の学生生活を送ることができた。しかも、三年間は中国の湖南師範大学で、三年間は日本の都留文科大学である。私はこの六年間を誇りに思っている。特に、都留文科大学

22年度留学生送別会
(1列目右から4番目は本人)

旅立つことば 大学院修了生から

これから大切にしていきたいこと

臨床教育実践学専攻
志村麻奈美

2年間というのは短いもので、卒業する日がもう来てしまったのだと少し寂しい気持ちでいます。こうして院生生活をふり返ってみると、本当に良い出会いに恵まれ、学ばせてもらえて幸せだったと実感しながらこの原稿を書いています。

私の所属する専攻は、子どもに関わる職業を目指す者、教育関係者が多く、各々が違った視点・目的をもって、研究に取り組んできました。ただ、教育のあり方や意味を探り、今日の教育を良

くしたいという思いは共通していたと感じています。私は、そのような志を持っている同期、先生方、先輩後輩から刺激を受け、今までもっていた教育観を改めて、考えながら、2年間過ごしてきました。考えてきたことのすべてを具体的に書くことはできませんが、少し見えてきたことを一つだけ載せたいと思います。

抽象的になってしまいますが、子どもにとって優しさのある大人になりたいと思いました。それは単に甘えさせるとか、やりたい放題やらせるとかではなく、しっかり子どもと向き合っ、気持ちを受け取りたいということです。

今までは子どもの心にあまり重点を置かず、大人側から教育について考えていました。



思い出の臨床教育実践学専攻院生研究室

しかし、それだけでは駄目で、子どもは大人をどう見ているのかという視点が大事だと気づきました。子どもは大人にも、気持ちをわかってもらいたいという思いを持っていると思うのです。当たり前のことかもしれませんが、このことに気づけたことは、私にとって非常に大きかったです。今日、子どもの心がどこか置き去りにされているように感じるがあります。院で学ぶ中で、もっと子どもの気持ちに沿った教育のあり方を探っていく必要性を感じ、このことを考えてきました。

この2年間で考えてきたことは、どんな生き方を選んでも、どこかで生きてくるものではないかと思っています。上述したことは、子どもに限らず、人とのつながりの中でも共通する姿勢だと思うからです。そのことに気づけただけでも、この2年間は本当に意味ある2年間だったと思います。最後に、ご指導して下さった先生・先輩方、後輩、そして、支えてくれた同期のみなさんに心から感謝します。ありがとうございました。

での三年間、かけがえのない大切な思い出が数えないほどできた。無論、そのすべては時間を共にしてきた都留文科大学の先生たちと学生たちのおかげである。皆さんに、感謝の言葉をいくら述べても足りないくらいの恩恵を受けている。中国語にはこのような言われがある。「百年修得同船渡、千年修得共枕眠」。同じ船に乗れたのは百年の修行があったからであり、夫婦になり、枕を共にできたのは千年の修行があったからであるという。都留で皆さんとの出会いは何百年の修行だろうと思

うと、この縁を一生大事にし続けたい。

都留の山、都留の水、都留の人々、優しくて温かくて甘い。都留に来て正解だと何度も何度も思った。都留は紛れもなく私の日本の故郷であり、故郷を離れるのは辛い。しかし、故郷というのはいつでも帰れる場所であり、離れるのは帰れるからである。

旅立ちに際して、この場を借りて誓いたい。社会人になり、故郷へ錦を飾ることができるよう頑張る。



卒業論文・研究論文・修士論文一覧

学部卒業生、文学専攻科、大学院研究科修了生の卒業論文、研究論文、修士論文の全タイトルを掲載する。今回掲載したのは、今年度に提出された卒業論文等であり（前期卒業・修了も含む）、実際の卒業生・修了者とは異なる場合がある。

初等教育学科

麻場一徳ゼミ

- 新澤真波 子ども達の体力低下と遊びに関する研究
 萩原知佐 小学校体育における空手道の応用
 鈴木美乃里 小学校体育における持久走に関する研究
 佐藤貴信 小学校体育ボール運動サッカーについての研究
 藤原佳記 サッカーのロングキックにおける利き足・非利き足のフォームの比較
 渡邊由季 サッカーのポジション別にみる性別特性—サッカー経験歴による違い—
 鈴木健司 ラグビー競技のキック動作における利き足・非利き足の違いについての研究
 下山優茉 バトミントンにおけるオーバーヘッドストロークに関する研究—初心者・経験者のフォームに着目して—
 千葉 茜 女子大生の投動作習熟に関する調査—ソフトボールにおけるアンダースロー（ウィンドミル投法）の場合—
 高須大樹 ビッチから見る100m走の考察—都留文科大学陸上競技部の場合—
 笹本 絢 800mの効率の良い走り方についての研究
 三島夕佳 4×100mリレーについての研究—都留文科大学陸上競技部男女の比較—
 寺田ゆず 女子100mハードルの記録向上における—考察—都留文科大学陸上競技部Y・Tの場合—
 林 陵平 三段跳における踏切動作の伸張—短縮サイクル運動についての研究—
 青木邦成 男子4×100mリレーにおける各区間タイム分析—都留文科大学の場合—
 東郷さゆり 日本の女子マラソンについて
 飯尾 絢 女子400mにおける区間ごとの疾走のペース分析
 和田あずさ 中学優秀女子100mハードル選手のその後の記録の推移について

市原 学ゼミ

- 伊川昌弘 子どもの学習意欲を高める為に教師はどのような働きかけ、言葉かけをおこなえばよいのか
 江守博光 ほめることとしかることが与える心理的影響について
 大森千尋 友人関係における快適な悩み相談（友人関係）
 岡田友美子 友人との快適な悩み相談
 高村一帆 ストループ課題による刺激後の記憶の歪み
 竹内みずえ ふれあいの記憶と愛着について
 中分博水 青年期における友達とのつきあい方と主観

的幸福感

- 宮本賀代 親の養育態度と子どもの学校適応
 柳田晶子 集団凝集性とパフォーマンスについて

一柳英隆（坂田有紀子）ゼミ

- 長谷川緑・本多秀華・渡井千恵 草刈り頻度の違いがカワラナデシコの生長と繁殖に与える影響—カワラナデシコの保全を目指して—
 井上大輔・大澤昭彦・宮崎ここり・横森 隆 戸沢川の水温変化とそこに棲むカジカへの影響—カジカの戻ってくる川を目指してⅢ—

植村憲治ゼミ

- 荒井美穂子 幼児における数学能力と数覚能力の検証—子どもが算数好きになる指導法を目指して—
 飯野にいな 各国の算数教育の比較—指導法の違いと算数科の位置付け—
 三輪幸紀 算数教育の重要性を認識させる指導法の研究
 桃木 亮 分数におけるつまづきの分析と指導法の研究

春日作太郎ゼミ

- 石田和良 親子関係・異性関係に問題をかかえる大学生女子の対人場面における認知と行動の変容に及ぼす効果の検討—8事例の比較—
 嘉藤 彩 「必要な時にも他者に援助を求めることができず、逆に“面倒見の良い人”を演じてばかりいる」と訴える大学生女子の変容過程
 佐野ふみか 当事者研究：「親しい友人にもささいな事でも本心を語れないし、分らなくなってしまう」と訴える大学生女子の自助グループにおける洞察の深まり
 新開友香 「他者の好意を受けたり援助を求めることができない」と訴える大学生女子の空椅子技法を用いた自主グループによる対人場面における認知と行動の変容—進行役学生の関わり方の変化との関連性を通じて—
 杉本里美 アグレッシブな「仕切り行為」により対人関係に不適応を引き起し自己否定に陥る大学生女子の行動変容に及ぼす半構成的エンカウンターグループの効果—4事例の比較研究—
 渡辺彩美 自己無能感から情緒不安定になり閉じこもる大学生女子の気づきに及ぼす半構成的エンカウンターグループの効果—当事者研究を通して—

後藤道夫ゼミ

- 海野彩花 子どもの貧困—貧困家庭に育つ子どもに

卒業論文一覧・初等教育学科

対する学校の対応—

上田陽平 新規学卒定期採用慣行の成立・定着の過程

林 奈穂 学校教育と図書館

星 祐樹 トヨタ自動車のアメリカ進出 —NUMMI
とアメリカ流トヨタ生産方式—

宮下知美 自立支援塾からみるニート・ひきこもりの
人々が働くまでの居場所づくり

村上恵悟 就学援助 —子どもの貧困対策制度の現状—

森川 彰 自動車保険 —自賠責保険と任意保険にお
ける人的保障の一本化に関する考察—

山田有香 行政による子育て支援 —甲斐市の子育て
支援策を考える—

山田 敬 リンク栃木ブルックスの研究 —スポーツ
によるまちづくり—

佐藤 隆ゼミ

吉田美香 総合的な学習の時間での学び

古川理恵 楽しい学び —学びのレリバンスがある授
業—

臼城あゆみ 子どもの失敗

渡邊里紗 求めてしまう教師力

朝倉貴泰 自由の森学園の教育理念から見た日本の教
育

半田裕子 子どもにとって本当の「学び」とは

吉岡亜実 子どもを取り巻くストレス環境 —自分ら
しく過ごせる教室—

根本季絵 学校・地域・家庭でつなげる、「教育」の
形

古里誠也 生きる力としての他者とのかわり —学
校や教師の役割—

福岡莉沙子 本が子どもに与える影響またその役割
(アニメーションを通して)

小澤早紀 子どもと子どものつながり

清水雅彦ゼミ

岩瀬真里依 音楽が胎児に与える影響

武井由佳 こころを育てるために —情操教育、音楽
を通して—

田吉愛美 障害児と音楽のかかわりについて

山崎清美 呼吸と感情の関連性 —音楽的・教育的観
点から探る—

松浦志乃 音楽教育の国際比較

梶守光恵ゼミ

五十嵐彩恵 子供の可能性を引き出す音楽科教育

今澤幸恵 楽譜出版、編集のゆくえ —ショパンに焦
点を当てて—

梅田志緒理 音楽科嫌いの子どもをなくすために
—教科の枠を超えた音楽教育—

志村美佳 チャイコフスキーの生涯、作品の時代背景

田村彩華 音楽が人に与える心身への影響 —演奏す
るからだづくりと音楽療法について—

土江知子 子どもの自発性を促す音楽づくり —小学
校音楽教育に視点を当て—

三嶋友香里 自己表現を引き出すための手立て —音

楽に視点を置いて子どもとかかわる—

宮武由佳 子どもの発達と音楽 —子どもが自然に音
楽と関われる環境づくり—

添田慶子ゼミ

板垣賢司 コーディネーショントレーニングについて
の研究 —その普及について—

齊木美穂 甲府市における幼児の生活リズムに関する
研究 —睡眠に着目した実態調査より—

西野瑞紀 小学生における体力と生活習慣の関係につ
いて

中西節子 大学生の運動阻害要因に関する研究 —都
留文科大学生の場合—

高田理孝ゼミ

岩元七樹 計算課題に及ぼす BGM 効果

植村信介 イメージが記憶に与える影響 —保持時間
の観点から—

奥ゆき子 画像情報の記憶に関する一考察

熊谷美幸 出生順位と性格 —兄弟関係は性格形成に
影響を与えるか—

小山沙世 失敗経験後の原因帰属の違いが自己効力感
に及ぼす影響

高橋 奨 学習方法による節約率の変化に関する一考
察

田中祐一 同音異義語の再認記憶に及ぼす文脈効果の
変化

堀之内志直 文章理解とスキーマ

竹下勝雄ゼミ

新井はるか 現代人の色彩に対するイメージとその一
考察

飯石加奈子 染色文化における色彩感覚の意匠研究

市川実咲 生きる力を拓く図画工作科の授業について
の考察

伊藤晋吾 図画工作科におけるデジタルカメラ(写真)
の利用

押田夏季 図画工作が好きになる授業についての一考
察

小林愛美 時代が映す女性の身体表現と絵画との関係
性

日向 梓 絵画表現におけるグラデーション効果の可
能性

米山貴史 創造性を育むための絵画教育の可能性

田中昌弥ゼミ

磯村琢洋 英語学習意欲を上げる小学校英語教育
—日本とアジアの現状と課題から考える—

伊東一磨 総合的な学習の時間の充実を目指して
—キルパトリックの教授理論から見る、子どもと育
てる生きる力—

伊藤千穂 学習の意義と自己実現 —学習者・教育者
という立場の違い—

井上瑞穂 小学校の教育活動における道徳の時間の果
たす役割と可能性

卒業論文一覧・初等教育学科

金澤沙樹 発達段階別に見たいじめの実態と当事者の心理 ―竹内常一のいじめ研究についての今日的検討―
瓜生早織 子どもと教師のかかわりについて ―横湯園子さんの実践を元に―
岡 博也 子どもの居場所はいかにして生まれるのか ―自尊心感情を失いかけた子どもの事例から―
花形浩美 学校教育におけるアニメーションの可能性
日野淳理 フィンランド・メソッドから学ぶPISA型読解力 ―日本の子どもたちにPISA型読解力を身につけさせるべきなのか―

筒井潤子ゼミ

青柳美弥 教師と向き合うために ―横湯園子先生の実践と思想を通して―
坂田比呂子 重い母と生きづらい娘 ―母娘(おやこ)関係を見直す―
長井里奈 子どもの心の育ちを支える ―「ほめる」という視点から―
藤川竜輔 さまざまな困難を抱える児童の援助 ―学童保育の視点から―
藤村菜央 自己受容 ―“ことば”にすること―
米盛 薫 集団所属から見る自己の形成 ―自分らしさを求めて―
成瀬共美 自己抑制してしまう「いい子」たち ―自分らしく生きるためには―
長沼ゆかり 『女性』が『母親』になること ―女性の子育てと生き方について考える―
宮原恵梨 児童指導員の立場での、子どもとの治療的コミュニケーションの可能性
川畑 智 依存症

鶴田清司ゼミ

石井 壘 国語教育でメタ認知を育む
伊橋京子 読解の手立てとしての群読の有効性を探る
岩部尊之 論理的思考力・表現力を鍛える作文指導の研究
川又政哉 だれでも書ける作文指導 ―書いてみたい。表現できた。認めてくれた。―導き手としての教師の評価・支援を探る
豊間根史哉 読解力を育てる授業づくり ―日本とフィンランドの教科書比較から―
野木美穂 論理的思考力を育てるディベートの研究
福永知晃 豊かなイメージで読解力をはぐくむ ―広がる想像力とつながる想像力―
藤井翔子 国語教育において有効な板書とは
松井美樹 聴く力を育てる授業
松原圭史 暗記を生かした国語教育の有効性
依田后可 伝え合う力を育てる国語科メディア教育

寺川宏之ゼミ

泉 景子 算数教育における言語活動
小山田夏美 小学校算数教育と九歳の壁の関係性 ―計算のつまづきから考える―
鷹野満脩 算数科における子どもたちのつまづきと授

業作り
手嶋卓哉 図形概念の形成と授業作り
林 順人 「生きる力」と算数科教育

鳥原正敏ゼミ

木田聡史 評価から考える図画工作科
小林佳代 豊かな人間性を育む美術教育 ―教師のあるべき姿―
安藤園華 図画工作科の目標について ―つくりだす喜びとは―
瀬戸口遥 図画工作におけるレジャ・エミリアの可能性
日高真理 図画工作科における評価方法についての考察
久保田千賀 遊びの可能性について ―図画工作を中心にして―
佐々木真由 楽しい授業 ―視覚的効果の可能性について―

中井 均ゼミ

猪狩辰美・原野 舞 相模川(桂川)の川砂の研究 ―その2―
小澤聖子・神田沙由理・山岸 亘 沖縄県宮古島の海岸砂の研究 ―その3―
坂田次郎・田窪紘士・竹内耕太 山梨県郡内地方の鉾山について ―その2―

西本勝美ゼミ

山口智久 学校と家庭をつなぐ教育改革 ―学校参加をどう作っていくか―
川瀬那梨加 人とのつながりで自己を拓く ―自他のとらえ直しとその条件―
井上直子 親子が育つ地域社会を目指して ―今求められる子育て支援とは―
楠 怜子 階層社会に向き合う教育 ―学校的価値にとらわれない学び―
曾我部静香 人と人が繋がる学校づくり ―地域に根付く学びを考える―
竹内美加子 子どもが育つ、ひらかれた地域 ―児童虐待を見据えて―
内藤出雲 不平等の構造転換にせまる ―多文化教育の理念と実践を通して―
藤松康之 地域の未来を考える学び ―地域の高校が担う役割―
君島由美江 授業からひらく希望 ―集団の中で「いきる」学力を育てる―

箱石泰和ゼミ

岡林千鶴 愛があふれる学級づくり ―子どもたちが安心していられる学級―
瀧塚達也 子どもの個性を育て、豊かにする表現活動
福岡瑞穂 優れた授業を支えている原則とは何か ―斎藤喜博の授業論の考察―
古屋友巳 習熟度別指導のこれから
藤丸和彦 「優しさ」の教育を追い求めて ―灰谷健

卒業論文一覧・初等教育学科

次郎の検討から教育実践へー

藤本 恵ゼミ

- 小波津龍平 小説版『機動戦士ガンダム』研究
 佐久間千明 あまんきみこ『車のいろは空のいろ 白
 いぼうし』研究
 佐藤 泉 『イリヤの空、UFOの夏』論
 柴北みどり 石井桃子研究 ―子どもの読書活動につ
 いて―
 早川美里 上橋菜穂子『獣の奏者』論 ―親子のため
 のファンタジー―
 前田瑞希 芥川龍之介『杜子春』論 ―芥川の残した
 仕掛けからの考察―

森 博俊ゼミ

- 森 絵美 LD児の英語指導
 英賀さくら 通常学級における特別支援教育のあり方
 尾形桃子 院内学級における教育とそれを担う教師の
 役割 ―病弱児が求める教育に応えるために―
 高原理美 聴覚障害者のスポーツとコミュニケーション
 榎田枝里子 思春期の心のゆれと自己形成
 長江理可 ナラティブ・ラーニングと特別支援学級に
 おける学習指導
 林 憲司 「交流及び共同学習」における障害児理解
 村本草太 障害児に対する性教育の意義

山崎隆夫ゼミ

- 楠山友美 子どもたちをひきつけるドラえもん
 ―今、子どもたちに求められているものを探る―
 田川貴子 “本当の自分に出会える”教育
 篠山祐輔 今日求められる教師の力とは ―現実と向
 き合って生きる若手教師への聞き取りから―
 橋本 彩 子どもの抱える負の感情について ―負の
 感情を見つめる教育実践を考える―
 丸山祐未 教室の困難と向き合う教師
 村上 萌 共に学び共に安心できる教室 ―アスペル
 ガー症候群・R君との出会いを通して―
 村山美香 現代に生きる子どもを支える『子育ての在
 り方』とは
 吉野真由 子どもに安心を与える教室とは ―「甘え」
 の意味を問いながら―
 高木雅史 臨床教育学に流れる人間へのまなざしを考
 える ―都留文科大学での学びを通して―

山本安夫ゼミ

- 菊地布由香 子供の自立を支える学級づくり
 佐野瑞華 電池と測定について
 白神秋信 光の性質と自然現象に関する研究

山森美穂ゼミ

- 草場 裕・住田有香・村上 彩・吉岡和香菜 中学生
 になって理科を嫌いにならないための小学校理科
 宮城美里 都留市における大気エアロゾルの測定と小
 学校環境学習への応用の試み

柳 宏ゼミ

- 豊田賢輔 クラブ活動種目の継続・非継続に関する研
 究
 菊池夏海 都留文科大学運動部の活動に対する意識及
 び実態研究
 和田憲人 肩関節と股関節の可動域・脚裏と腰部の柔
 軟性に着目したアクアトレーニングの有効性 ―本
 学準公式野球部員を対象にして―
 与那覇雅康 大学スポーツチームのリーダーの関する
 研究 ―本学チームが求めるリーダーとは―
 山田憲吾 サッカーのキック動作の習得過程に関する
 分析研究
 久保嘉代子 バレーボールにおけるブロックアウトス
 パイクの動作分析研究
 小野友紀 バレーボールのレシーブ評価の研究 ―攻
 撃の成否と関連して―
 萱沼美穂 バスケットボールにおける攻防の時間に着
 目したゲーム分析
 小澤那月 都留市ミニバスケットボールスポーツ少年
 団の団員と指導者の活動意欲に関する研究
 藤江安衣 バスケットボールのシュートパフォーマンス
 とルーティンの関係について ―フリースローに
 着目して―

吉住典子ゼミ

- 相田佳澄 日常生活言語 ―ストレスとの関係性①―
 上野裕未 日常生活言語 ―ストレスとの関係性②―
 野村勇氣 日常生活言語 ―ストレスとの関係性③―
 荒木 瞳 食生活に関する研究
 梅木健太郎 被服機構学 ―被服圧とカロリー消費―
 小林由佳 食育に関する研究 ―手作り豆腐キット―
 横山和孝 食育についての研究 ―摂取カロリーと尿
 中塩分量の関係―
 上井葉子 食育についての研究 ―地産地消のレシピ
 集①―
 澤田那奈 食育についての研究 ―地産地消のレシピ
 集②―



卒業論文一覧・国文学科

国文学科

上代文学 鈴木武晴ゼミ

飯島里奈 『日本霊異記』の数詞考
 金沢博子 山の文学と信仰
 小泉奈未 古事記における死生観
 小坂萌実 弓矢の文学と文化
 篠崎香緒里 万葉集の衣料と色彩
 山内正博 「因幡の素兎」研究
 渡辺ちひろ 万葉の恋

中古文学 加藤静子ゼミ

青木美緒 『源氏物語』末摘花考
 阿久澤早織 『更級日記』小論 ―描かれた家族と物語―
 奥村美紀 『狭衣物語』にみられた親子関係
 桑原愛子 『狭衣物語』と「絵」
 佐藤愛華 『紫式部日記』における女房論について
 高木真美 『狭衣物語』の方法 ―歌語的表現による人物提示―
 鳴海一徳 狭衣物語の語りの構造
 林 瑠衣子 『狭衣物語』における服飾表現から
 原 亮太 『狭衣物語』における女君たち ―一品宮と宮の姫君を中心に―
 原田由香 『狭衣物語』における女君の造型
 宗本八重 上中古説話における「地獄」と「閻魔大王」

中世文学 佐藤明浩ゼミ

藺田いづみ 『鉢かづき』の「鉢」について
 武井明子 和歌における音声表現について
 平山芳依 御伽草子『酒吞童子』の特色
 山下佐和子 中世説話における「笛」
 遠藤拓哉 神皇正統記成立の背景についての考察
 富沢茉央 『平家物語』における平経正像の考察

近世文学 楠元六男ゼミ

大屋志織 諸国物語 ―『一休諸国物語』を中心に―
 佐藤美姫 『おくのほそ道』笠島考
 清水美波 山口黒露とその紀行 ―芭蕉の影を追って―
 高橋初穂 杜国考 ―芭蕉はなぜ杜国を愛したか―
 高橋寛子 江戸時代前期における「牡丹灯籠」の変遷
 西田美佳 「塚も動け我泣聲は秋の風」
 舟澤有香 『おくのほそ道』種の濱章段考
 森 晴香 近世における化け猫 ―鍋島の化け猫騒動―
 矢島和希 田植草紙 ―その内容と田植唄のつながり―
 山口奈菜 『呵刈葭』考 ―「ん」論争を中心に―
 六渡千晶 芭蕉と垣籠の藤波

近代文学 阿毛久芳ゼミ

新 祥子 谷崎潤一郎『春琴抄』論
 石川久美子 樋口一葉「十三夜」論 ―百年の時間(とき)を越えて読まれ続ける月夜の物語―
 伊藤 晶 山田詠美『ぼくは勉強ができない』論
 太田香里 太宰治「冬の花火」論
 奥野佳那美 高村光太郎「猛獣篇」論

川村 恵 新美南吉童話論
 久乗 恵 「高野聖」論 ―登場人物の存在と表現―
 篠田翔平 北園克衛論
 白石 葵 吉本ばなな『キッチン』論 ―新しい人間関係の創造―
 進藤僚太 夏目漱石「夢十夜」論
 戸田智帆 谷川俊太郎『旅』論 ―『旅』における欲望と葛藤―
 中島佳菜子 眠る1970年、逃避と対話 ―村上春樹『1973年のピンボール』論―
 山下悠平 武者小路実篤『友情』論 ―「神」の相対化による絶対化―

近代文学 新保祐司ゼミ

遠藤孝恵 宇野千代論
 小宮山 早 三島由紀夫論 ―彼の人生と作品から死を考える―
 志水里江 中原中也論 ―中也にとっての死と詞―
 牧 佑香 芥川龍之介作品から見る人間の利己心 ―egoism―について
 松田奈実 安部公房「棒になった男」論
 望月麻衣 巷談師 坂口安吾
 安永優希 作品『ひかりごけ』にみる武田泰淳 ―生者から肉塊へ―
 横山静香 中勘助論
 阪本三佳 詩人・柳田国男
 小林沙由理 白樺派武者小路実篤『友情』論
 鈴木太陽 伊藤整に見る近代日本人の心理
 山栴沙織 北村透谷論 ―現代日本への警鐘―

近代文学 田中 実ゼミ

奥本真理子 島崎藤村「破戒」論
 小島直人 中島敦『山月記』論
 粕尾 藍 村上春樹「神のこどもたちはみな踊る」論
 幸島利聖 森鷗外『雁』論 ―「僕」の欲望―
 福地 敦 内田百閒「件」論
 古沢 翔 芥川龍之介『地獄変』における相対主義と芸術の価値
 松野下千恵 村上春樹『風の歌を聴け』論
 三浦千明 芥川龍之介『藪の中』論
 本嶋佑己 村上春樹「海辺のカフカ」における世界の同時複数性とセックスと暴力の相関関係
 三井千佳 寺山修司メルヘン全集をめぐる
 山川悠里 小野町子について ―尾崎翠『第七官界彷徨』を中心に―

近代文学 古川裕佳ゼミ

田村昌之 芥川龍之介『藪の中』論
 鳥居里枝子 「日記」から見る谷崎潤一郎『鍵』論
 福沢志穂 吉行淳之介「夕暮まで」論
 牧 真唯子 福永武彦「草の花」論
 三室百花 安岡章太郎『海辺の光景』論
 渡邊真梨那 三島由紀夫『潮騒』論

卒業論文一覧・国文学科

国語学古代語 高橋宏幸ゼミ

飯田真希 「こころもとなし」が表す心情・状況の特徴について

石橋奈実 副詞「はた」についての考察

狩野智栄美 漢語と和語の用法について

小山純奈 感情形容詞における意味派生の考察

島 悠紀 副詞における類義語の位相について

塚本茂樹 接頭語「うち」の働きについての考察

永見悠季 中越方言について 一民話・郷土資料から考察—

久保田健太 離散動詞の語彙論的考察

高島由香里 腐敗を意味する動詞の変遷について

国語学近代語 樋渡 登ゼミ

浅井まりも 雑誌『赤い鳥』における擬音語・擬態語

新井彩香 現代漫画に見られる特殊拍の表記について

上田麻衣子 富山県西部方言の原因・理由表現について

江口桃香 大分県宇佐方言における音韻研究

岡田知佳 後期江戸語における夫婦の呼称について

加藤聡恵 幼児絵本にみられる擬音語・擬態語について

鈴木智陽 人情本『清談峰初花』における助詞・助動詞研究 一江戸時代資料としての性格—

高橋真由佳 文化庁『国語に関する世論調査』からみる都留文科大生の意識調査

田中佑佳 戦後新聞求人広告における文体の研究

野田 恵 為永春水自筆本における仮名字母の研究

前浜美香 石川県能登半島方言語彙の分布と変容

奥山たける 雑誌広告のキャッチコピーについて

伊藤 茜 近代における終助詞「かしら」の発達とそ

の使用者属について

漢文学 寺門日出男ゼミ

伊藤裕介 『尚書大伝』について

中 聡佳 原初『搜神記』考

二階堂達人 『史記』における友情の描写

金井陽一 伊藤仁斎『孟子古義』について

五十嵐佳奈 『列女伝』における女性の倫理観

高戸風香 中国文学における猿について

国語教育学 牛山 恵ゼミ

相木 遙 『性暴力を扱うノンフィクション作品の検討』

荒海綾香 中学国語教科書に掲載されている戦争文学作品の考察

石井彩音 工藤直子作品論 一『ともだちは海の中に』を中心に—

大野 慧 中学校国語科における歴史小説教材の変遷とその可能性

小山内愛歌 中学校国語科における作文の指導法の変遷と実際

柏原 純 中学国語教科書における古典の入門教材

加藤美幸 中学校国語科における漢字教育

木村有希 小学校における読書指導

倉内洋介 日本作文の会の作文指導について

澤 可純 小学校国語科の教科書における物語作品の挿絵の効用

仲塚千香 芦田恵之助の「随意選題」

藤田基紀 中学校国語科における落語の教材化の可能性

森 麻衣子 幼稚園における言語教育

樋川千晶 中学校国語科「話すこと」の指導

卒業論文一覧・英文学科

英文学科

大平栄子ゼミ

遠藤江利香 *MAY YOU BE THE MOTHER OF A HUNDRED SONS* における女性差別について

石井麻里 *Bend It Like Beckham* にみるインド系移民のアイデンティティー

堀田有利 *Peter and Wendy* 一ピーター・パンとネバーランド—

有川知恵子 *Lord of the Flies* 研究

荒木未来 からゆきさんから見る日本とシンガポール—シンガポール国立博物館所蔵資料にみる「からゆきさん」—

山口恵理佳 *Proud To Be Amish* に見る Amish 的生き方

原田麻未 *Burned Alive* にみる名誉殺人

大塚貴央 初等教育英語導入への軌跡

細羽見有里 *The Small Hands of Slavery -Bonded Child Labor in India* にみるインドの債務児童労働

姫野浩明 *Spirited Away* について

窪田憲子ゼミ

岩瀬望美 *Alice's Adventures in Wonderland* における非日常世界と存在の意義

東照寺優子 J.R.R. トールキン『指輪物語』研究

江連友美 A.A. ミルン *Winnie-the-Pooh* 研究 一魔法の森へ帰る—

山本真子 C.S. ルイス『ライオンと魔女』研究 一『ライオンと魔女』における再生—

熱田智紘 『大いなる遺産』における理想の紳士像と階級の関連

風間ななえ ロアルド・ダール研究 一 *Charlie and the Chocolate Factory* —

卒業論文一覧・英文学科

小宮和歌奈 Thomas More, *Utopia* 研究 ―対話から見える最善国家の姿
 佐藤愛美 Beatrix Potter, *The Tale of Peter Rabbit* 研究 ―人々を魅了し続けるウサギ―
 有岡奈津 マザーグース研究 ―マザーグースの押韻と伝承の力強さ―
 滝口瑛子 Jane Austen, *Mansfield Park* 研究
 佐野 愛 *Little Women* 研究 ―孤独から見る家族の愛情―

竹島達也ゼミ

津田加奈子 *Fences* における Troy の人間像
 村松佳奈恵 Tony Kushner 作 *Angels in America Part One: Millennium Approaches* の世界 ―リアルとスペクタクル―
 渡邊恵里那 BRIGHTON BEACH MEMOIRS に写された家族 ―写真的観点からの考察―
 佐山裕子 *Lost In Yonkers* における Neil Simon の笑いの戦略とその背景
 石塚彩佳 ミュージカル『ヘアー』の音楽的観点から見る 60 年代アメリカ
 高山真理子 Neil Simon BB3 部作の世界観
 川口真緒 Belasco's *Butterfly* ―The Existence of Cho-Cho-San for David Belasco― (ベラスコの蝶 - デイビッド・ベラスコにとっての蝶々さん)
 藤原紗登子 トニ・モリスンの文学における一考察 ―愛・アンデンティティ・コミュニティの観点から―
 小宮麻美 *West Side Story* と *Romeo and Juliet* における間テクスト性
 三浦美香 Donald Margulies の作品から見るユダヤの特徴
 村松のぞみ ミュージカル RENT における音楽が伝えるメッセージ ―1980 年代アメリカの光と影―
 脇谷康司 *Sticks and Bones* における理想の家庭像の崩壊

儀部直樹ゼミ

小林郁奈 アメリカ食文化
 大谷将也 『アンクル・トムの小屋』における白人と黒人 ―アメリカ奴隷制がもたらした宗教観の考察―
 田中紗利香 『アンクル・トムの小屋』と奴隷制度
 伊藤 肇 『風と共に去りぬ』から見る南北戦争と黒人観
 関 翔子 魂の音楽
 前田一樹 奴隷制の中で生まれた音楽 ―黒人たちの嘆き―
 入間川浩佑己 黒人音楽、レゲエの始まり
 吉岡亜希 科学がもたらした不幸 ―マーク・トウェインの『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児』論―
 三浦紗世子 『アンクル・トムの小屋』を通して考える黒人奴隷とキリスト教の関係
 村上紗織 アメリカの貧困と格差 ―つながりを求め

て―
 新崎梨紗 『アンクル・トムの小屋』とキリスト教
 竹内沙織 セイレムの魔女裁判における一考察 ―魔女狩りの悲劇―
 宮島孝明 アメリカという銃社会

稲垣孝博ゼミ

池原千晴 *The Lord of the Rings* ―指輪の破棄を可能にしたものとは―
 比屋根裕梨 子どもたちの成長とナルニア国
 猪口明日香 Edmund Spenser の *Amoretti* と *Epithalamion* ―2 作品にみる多面的要素と人生との関連性―
 根 千容 不思議の国の翻訳について
 菅野数由 ジョージ・オーウェル作『1984』における洗脳と感情変化の関係性
 藤田孝平 19 世紀のユートピア文学 ―ペラミーとモリスの相違点―
 原口彩夏 『グリム童話』における女性の強さ ―「ヘンゼルとグレーテル」に見る成長―
 谷垣いさみ Faulkner の “A Rose for Emily” に見られる時代の変化 ―作家の人生と作品の関連性―
 藤岡領平 ウィリアムズ・モリスの作品における日本文化
 谷茉莉香 スウィフトとアイデンティティ
 中込沙耶 イギリスの伝承・伝説からみるハリー・ポッターの魅力

鷲 直仁ゼミ

岩間あずさ 19 世紀イギリス絵画のメッセージ
 中村 綾 Dante Gabriel Rossetti の芸術と人生観について
 佐藤嘉美 ゴシック小説
 小林恵里奈 大聖堂のまなざし
 天野小百合 絵画から学ぶ当時のファッション
 室屋里実 エールから見るイギリスの酒文化
 土屋円佳 Through the window―窓を通して見えたもの
 東 由衣 British Muslims ―イギリスとイスラム―
 松本弥子 イギリスにおける子供服の発展と児童文学作品との関係
 宮藤詩帆 Hamlet の世界における見る者見られる者、そして演劇
 望月のぞみ J.E. ミレイの《オフィーリア》に潜むリアリティ
 西澤佳世 キリスト教と音楽 ―教会音楽によせて―
 鈴木真菜美 ブリティッシュ・ロックと若者
 西城恵子 The Problems of American Education アメリカの教育問題
 千葉秀吾 イギリス演劇における人間性『Saint Joan』 ―中世・近代から学ぶ―

卒業論文一覧・英文学科

中地 幸ゼミ

- 麻町卓司 Toni Morrison の『スーラ』における愛と悪の存在
 深沢美緒 Amazing Grace —John Newton「恩恵」のゆくえ—
 菊地美保 ローザ・パークス —キリスト信仰から見るバス・ボイコット運動—
 稲垣 匠 ELVIS PRESLEY —アメリカ音楽を変えた男—
 上野亜里紗 *The Magical Adventures of Pretty Pearl* における Virginia Hamilton のフェミニズム的視点
 倉島和美 アリス・ウォーカーの作品から探る黒人女性の自立の闘い
 長又みらの A Study of *The Bluest Eye*: Black Identity in a White Supremacist Society (*The Bluest Eye* 論 —白人至上主義社会における黒人の Identity の所在—)
 鈴木健太 *The Bluest Eye* における白人中心の美意識
 山本真由 *M.C.Higgins, the Great* 作品研究
 鶴田果歩 ボブ・ディラン —ユダヤ系からの逃走と変身—
 中島実可子 危うきマッチョ・ヘミングウェイ —同性愛と男らしさ—

福島佐江子ゼミ

- 須藤圭次郎 ポライトネス・ストラテジーにおける性差
 岩見香里 語用論的能力の必要性:「断り」の観点から
 藤田まりや Gender Differences in Communication
 高野正知 The Importance of Pragmatic Competence: Teaching Requests
 磯田弥奈 Compliments and Compliment Responses
 坪田裕介 敬意表現とポライトネス
 斎 美香 ポライトネスと間接発話行為
 高橋史弥 日本人の謝罪表現
 山口 彩 男ことば・女ことばに関する一考察

西出公之ゼミ

- 中村美咲 小説の会話文・劇のスク립ト・映画のセリフ —Charlie and the Chocolate Factory の場合—
 志村道子 2つのフリーウェア・コンコーダンスの比較
 小澤恭介 Peanuts のコーパスによる分析
 今泉麻弥 謡曲翻訳についての考察
 木村友美 マザーグースの教育的価値
 落安成美 流行音楽で見るアメリカの時代的特徴
 日野 淳 デジタルとアメリカ文化
 桑野彩華 Lewis Carroll の世界 —作家としての英語表現—

三浦幸子ゼミ

- 板垣恭兵 Consideration on Aims and Objectives of English Education in Elementary Schools
 佐藤安由子 The Use of Euphemisms in the Politician's Speeches
 椎根達也 A Study of University Students' Motivational Factors in Learning English
 久留範子 The Effects of English Education in Elementary Schools on Motivation toward Learning English in Junior High Schools
 前原和紀 An Analysis of Reading Skills in National Center Test for University Admissions and Teaching Reading Skills
 中野敬裕 An Analysis of Japanese Learners' L1 Transfer Errors in Kinmirai Progressive Tense

奥脇奈津美ゼミ

- 源田純平 Motivation of Studying English Abroad and Self-Development
 堀内みずき Differences Between Monolingual and Bilingual Speakers in Their Ways of Thinking
 恒吉亮祐 The Effect of Reading Aloud in English Learning
 小林理菜 小学校「英語ノート」の語彙分析 —小学校英語教材、中学校教科書の語彙の比較から—
 大森嗣子 小学校外国語活動への文字導入の有効性
 栃村有沙 Content-Based Instruction Designed for Foreign Language Activities at Elementary School in Japan
 中村太郎 The Effect of Shadowing in English Classroom
 上野卓也 The Relationship Between Personality, Motivation and Language Learning in Japanese EFL Context
 横山加奈 The Effect of Rapid Listening on Listening and Reading Abilities
 小野寺千夏 The Effect of Corrective Feedback in L2 Learning
 石田祐太 Acculturation Among the Grand Children of Contemporary Immigrants in Toronto
 黒田隆子 学校英語教育における発音記号を用いたフォニックスの導入とその効果
 縫 村 聡 Effects of Chants Accompanied with Enhanced Metalinguistic Awareness
 吉田直人 英語教師の役割 —教室で生徒を動機付けるには—

濱谷ピアソンエロイスゼミ

- 小林哲也 Task Based Language Teaching (TBLT) in Elementary School
 川村将太 The Ideal Teacher
 秋山香織 The History of English Education in Japan
 斉藤 崇 Giving Feedback on Students' Mistakes

卒業論文一覧・英文学科

大塚桃子 How to Motivate Junior High School Students for Learning English Through Warm-up
 加藤花織 The Cultures and Languages of the Native People in the World
 平川真也 The Effectiveness of Using Activities in English Lessons

岡田直也 English for Japanese High School Students : Juken Eigo as a Base
 坂原左哉佳 Coordination Between Elementary School Foreign Language Activities and English Education in Junior High School
 佐渡亜沙奈 Should Japan Follow Korea? : From the Point of View of English Education

卒業論文一覧・社会学科

社会学科

現代社会専攻

企業経営・労働とジェンダーゼミ

(指導教員：野畑真理子)

越智公俊 働きすぎとメンタルヘルス
 近藤由佳 ワーク・ライフ・バランス —仕事と育児の両立支援—
 中島千尋 情報通信技術革新による労働の変化
 藤野朋子 労働者の権利問題について
 小林由佳 日本の労働環境の現状と課題 —働きすぎの解消に向けて—

現代史ゼミ (指導教員：菊池信輝)

木下和成 新しい小売モデルとしてのユニクロ
 三浦祐介 歴史教科書が語る現実 —日中韓の比較から—
 沢田光佑 15年戦争に於ける汪兆銘の動向と南京国民政府の実態について
 高野裕介 マックス・ウェーバーから捉え直す、「近代」日本の始まりについて 序章
 篠原春奈 民衆への天皇崇拝の広がり —地方を例に見る—
 小口敦子 足尾銅山鉱毒事件における民衆運動の動向 —田中正造と反鉱毒闘争—
 小林諒一 山梨県における自由民権運動

現代社会論ゼミ (指導教員：進藤 兵)

加藤まどか 参加・体験による教育的普及活動 —21世紀の博物館のあり方を考える—
 金原夏貴 アイドルからみる大衆文化の形成 —AKB48はなぜ売れたのか—
 久米慶季 現代社会と学歴 —学歴の意味を考える—
 藏本真穂 現代若者の恋愛観 —都留文科大学の学生を対象とするアンケート調査からの考察—
 齋藤いずみ 無縁社会と社会関係資本 —社会関係資本と「縁」の考察—
 中島 彬 永田方正『北海道蝦夷語地名解』における松浦武二郎文献の影響
 花本彩音 日本の若者支援と今後の展望 —欧州比較

と3つの事例から—

林 高樹 失業・貧困問題と自治体政策 —労働者の「働く」を保障するために—
 林 裕樹 商業オリンピックの現状と今後
 町田賢司 雇用における格差 —雇用における男女雇用機会均等法は正への道—
 丸尾祥加 インターネット社会の光と影 —インターネットの二面性を探る—
 宮地さくら 日米安保体制と基地問題 —北富士演習場を事例に—

憲法ゼミ (指導教員：横田 力)

土屋慶政 憲法訴訟に見る、日米同盟と憲法の平和主義 —同盟体制の諸問題と安全保障構想における考察—
 望月美香 報道の自由とジャーナリズムの可能性
 戸来拓也 「公」教育の可能性 —教育の主体は誰か—
 加納龍太 現代の貧困と生活保障をめぐる問題 —公的扶助と憲法—
 竹見祐人 現代の貧困とそれを取り巻く環境
 田路智彦 マス・メディアの発展にともなう法制度の変容について
 田中摩志秀 性表現規制と表現の自由の現代的意義

社会哲学ゼミ (指導教員：平野英一)

早坂 亘 ベラーの共同体主義に対する理解と考察
 上野哲成 日本人と神 —民間宗教における神の存在—
 望月和太 道徳的観点から見る現代の少年犯罪

社会法ゼミ (指導教員：山崎英壽)

遠藤佑輝 労働者派遣制度が抱える問題点と今後の課題
 清水崇之 日本の労働環境と過労死問題 —過労死のない社会に向けて—
 佐々木裕紀 少子社会の子育て支援
 赤羽真由美 少子高齢化社会と年金問題 —あるべき福祉国家を求めて—
 森 一史 現代社会の労働と過労死についての考察
 滝口司人 雇用にかかわる現代日本の分析
 合田宇宏 高齢者に対する最低生活保障 —高齢者の

卒業論文一覧・社会科学

犯罪増加から社会保障の在り方を探る—
 小堂真嗣 ニート —若年無業者問題の現状とその支援における一考察—
 三輪麻友美 女性労働者を取り巻く環境 —均等法とその課題—
 富川巧巳 貧困による住居問題と社会保障
 岡崎健太 朝日訴訟の現代的意義
 大石 俊 憲法がめざす生活保護とそのゆくえ
 秋山慶太 労働者派遣をめぐる雇用問題と今後の課題 —“人間らしい雇用”を求めて—
 鈴木卓人 日本の労働時間制について

生涯学習論ゼミ（指導教員：畑 潤）

山本裕基 生涯スポーツの実現に向けて —多面的に見るスポーツとひとのかかわり—
 望月しおり 育児講座・サークルの役割 —育児の喜びの再考—
 伊東麻里子 学童保育を通して見る現代っ子の考察 —伝法児童クラブの子どもたちとの出会いから—
 酒井新司 現代教育を考える —体罰問題に焦点を当てて—
 中島美里 学校選択性がもたらしたもの —教育の自由化という言葉の裏に隠された問題点を探る—
 達谷有沙 学校とフリースクール —教育の歴史を学びながら考える現代の学校と教育—
 河合宏晃 社会関係資本の蓄積と活用のためのインターネットの可能性 —個人の満足と豊かな社会のために—
 宮村麻里衣 高齢社会における自立と共生についての考察 —老年期における生きがいと地域コミュニティ—

地方自治論ゼミ（指導教員：江波戸順史）

外地 愛 持続可能な地域コミュニティの創造 —行政主導から住民参加へ—
 浅井明佳 高齢社会における地域福祉とネットワーク —買い物難民に必要なものは何か—
 河村茉希 地域社会の高齢化と買い物難民対策
 内田哲也 NPO が地域社会における新しい公になるために
 岡田龍亮 「住んでよし、訪れてよし」のまちづくりへの挑戦 —笛吹市の新たな展開を考える—
 住友俊洋 地域特産品を活用した地域振興
 平井 淳 市町村合併による行政の広域化の検証
 田邊愛子 地方分権下における広域自治体に関する考察 —都道府県制度の発展—
 下平佳樹 現代社会に適した地域コミュニティ形成 —地域力向上に向けて—
 半澤真衣 公立保育園の民営化と働く女性の育児問題
 本田祐士 公立大学による地域貢献に関する考察
 柏木はる香 地域力再生に向けたコミュニティの活性化 —住民と行政の協働を考える—
 森泉美里 基礎自治体と広域自治体の関係性

日本経済論ゼミ（指導教員：村上研一）

井上裕介 現代日本における Neet 論に関する考察 —それは誰を指すのか、玄田有史と本田由紀の研究を元に—
 服部大作 トヨタ自動車の国際戦略における高収益体制の確立と崩壊 —プラットフォームの統合戦略の検討を中心として—
 鈴木友子 変容する日本経済と外国人労働者問題
 中水流 梓 教育をめぐる格差の地域的特質についての考察 —鹿児島県と神奈川県の実態比較を中心にして—
 武井達哉 日本の景気変動からみた個人消費支出
 河野仁美 山梨県内の産業構造と地域発展のための観光業の役割
 小栗沙千 長野経済の現状と課題 —県内製造業の生産と雇用状況を中心として—
 中居亜紀 日本発祥のファーストフード店 —自身の属する店舗の現状と課題—
 岡部正勝 日本における少子化に関する考察 —子供手当の課題と現状を中心—
 佐川 望 玩具産業の歴史と日本経済
 村松龍介 製紙業と地域産業の課題 —富士市における製紙産業—
 近江勇人 減反と耕作放棄地の関係 —横手市をもとに—

環境・コミュニティ創造専攻

環境教育ゼミ（指導教員：高田 研）

野邊國孝 現代の狩猟者を取り巻く環境とその意識 —山梨県内における聞き取りから—
 海田穂高 都市のイメージ演出方法の分析 —ベンチでみえる横浜のイメージ—
 今井新太郎 高速鉄道の地域に与える影響について
 前原 融 日本人のヘビに関する意識と文化 —日本蛇族学術研究所の取り組みから—
 山本絵里菜 山梨県における森林植生の回復過程について —笛吹川流域の森林荒廃と水害に関する考察より—
 堀内亜久里 都留市における小水力発電の未来
 奥村太威 公害地域の今と小学校・中学校の教科書が伝える公害 —子どもたちに伝えなければならないこと—
 十二村翔伊 都留市における郷土教育の考察 —織物産業から考える—
 薄井慎介 木質バイオマス利用の推進に向けて—山梨県内と県外を比較して考える—
 宮坂恵理 火渡りと人々の関わり —小布施町の「安市」を例に—
 宮崎高虎 日本人の動物観 —大月市猿橋町における人々のサルの捉え方から—

卒業論文一覧・社会科学

環境社会学ゼミ（指導教員：平林祐子）

- 石井千尋 雑誌記事におけるエコイメージの変遷
 一木則子 農山村における地域材を活かしたツーリズムの研究 ―小菅村、道志村を事例に―
 河合貴志 都留市と山梨県早川町のバイオマスタウン構想についての比較・検証
 後藤由貴子 食育としての学校給食の研究 ―食文化の再生を目指して―
 近藤成将 ハツ場ダム計画への反対運動から探る住民間の対立 ―長野原町の立て直しに関わる問題とは何か―
 中野結基 EV・PHVは低炭素社会実現に結びつくのか
 堀 俊輔 自然環境におけるトイレの研究 ―自然観光地にトイレを設置する際の条件―
 山本賢太郎 和歌山県太地町における捕鯨問題の研究 ―地域の伝統を活かした今後の展開―

地域環境計画ゼミ（担当教員：渡辺豊博）

- 小山紘慧 ホテルの里を用いた十日市場湧水郡の持続的発展を支える仕組みづくりの考察
 立石理沙 タトゥー・刺青によるコミュニティ形成 ―アンダー・グラウンドなコミュニティ解明―
 小南亨太 オバマブームから考える小浜市観光の現状課題と今後の方向
 石間陽平 協働による島田市中心市街地活性化への考察 ―グラウンドワーク三島を参考にして―
 富岡昭博 山梨県上野原市における中心商店街活性化への課題と今後の可能性への提案 ―パートナーシップによるまちづくり―
 神谷 彩 農的資源を生かしたビジネス展開について
 竹田知世 山梨県富士北麓地域での湧水・地下水の保全活動の新たな管理体制について ―条例・市民活動の現状から考察して―
 小島拓也 都留市十日市場における環境学習プロジェクトの提案
 舘田侑香 新潟県糸魚川市における地域活性化の可能性 ―ジオパークの視点から 観光立市として―
 吉中沙彩 市民・行政・企業・社会的企業・NPOとの協働による自然エネルギー拡大への取り組みの可能性と課題 ―エネルギーの地産地消に向けて―

地域経済論ゼミ（指導教員：千葉立也）

- 岩永 都 瀬戸市の窯業による地域づくり
 鈴木丈志 グリーン・ツーリズムによる中山間地域活性化の可能性と意義に関する考察 ―福島県南会津町を事例に―
 戸崎正基 下吉田商店街の価値発見・創造のまちづくり ―さまざまな仕掛けとその効果―
 根岸美佳 地域団体商標登録が伝統工芸品にもたらす変化 ―高崎だるまを例に―
 松井俊子 地域と共に歩む学校づくりの推進 ―新潟市における学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくり―

地域社会論ゼミ（担当教員：田中夏子）

- 小林隼人 生活の質を豊かにする地域スポーツ
 佐藤英大 ソーシャル・キャピタルを通じた持続可能な地域発展
 松浦伸哉 温暖化に対する自治体行政及び市民活動の取り組みについて
 南 克希 スポーツの特性を活かしたまちづくり
 村木伊織 「アニメ聖地化」のプロセスから新しい地域交流のあり方を考える ―鷺宮と城端におけるまちおこしの取り組みから―
 山田育与 「地域支援型農業」による都市農業および中山間農業再構築の可能性

都市環境設計論ゼミ（担当教員：前田昭彦）

- 前川 保 ドイツと日本における再生可能エネルギーの比較
 片山郁登 三菱鉱業の福利厚生制度への住宅営団の関わりの可能性 ―香川県直島を事例に―

農山村再生ゼミ（指導教員：泉 桂子）

- 井上顕吾 ダム上流域におけるアユ増殖事業の現状と課題 ―相模川水系道志川を例に―
 小松隆宏 これまでの学校林、そして環境教育としてのこれから ―山梨県都留市周辺の小学校の事例を通して―
 澤田由貴乃 地域住民が主体となった雑木林保全活動の意義と課題 ―オオムラサキを保全する2団体の比較を通して―
 島田和宜 国内社有林の環境対策に果たす役割と課題 ―住友林業の事例をもとに―
 東郷継直 ニホンジカ（*Cervus Nippon*）の保護管理の現状 ―山梨県特定鳥獣保護管理計画を例に―
 中川幸雄 農業生産法人による地域貢献の可能性 ―静岡県富士宮市・Mファームを事例として―
 中原智弘 地方都市における湧水の歴史的展開 ―鳥取県鳥取市及び静岡県三島市との比較―
 西丸堯宏 地域再生の手法としての地元学と地域ブランド ―都留市十日市場における食資源調査の実践―
 野中洋利 浜松市における農業の意義と今後の農業関連政策の展開 ―三方原地域を中心として―
 宮田大樹 木炭とその副産物の利用による林業再生の可能性

卒業論文一覧・比較文化学科

比較文化学科

伊香俊哉ゼミ

- 長田郁里 十五年戦争とマス・メディア
 菊池芽衣 特攻隊はなぜつくられたのか
 榊山 潤 戦没商船被害の実態 ―マルシップは如何にして壊滅したか―
 佐藤彩香 特攻の軌跡 ―窮地に立たされた特攻隊員の真意を探る―
 松本久美 ルワンダにおける紛争後社会の平和構築 ―人民間の和解のために―
 水谷友美 教科書には書かれていない事実と嘘 ―日本が行った中国人強制連行、強制労働のシナリオ―
 宮本一輝 グローバリゼーションと日本の変化
 屋我 歩 米軍政権下沖縄における抑圧 ―軍用地問題に見る沖縄戦後史―
 山之内菜奈美 日本とドイツの戦後補償
 鷺巣彩子 ホロコーストとユダヤ人

内山史子ゼミ

- 雨宮桐代 文化が観光資源に変わる ―パリの観光産業―
 磯谷 唯 多民族国家シンガポールの言語
 暮地 文 多民族国家シンガポールにおける「民族」と国民統合
 桑畑和将 売春から見るタイ社会
 小石理恵 カンボジアの貧困に関する問題とそれに対する貧困支援のあり方
 小牧佳代 アンコール遺跡の美術様式
 長岡愛実 フィリピンの宗教的マイノリティについて
 梨本英里 インド民族主義の背景にある社会問題
 前林真美 東南アジア地域のマスメディア
 松原未季 英語教育とアイデンティティー ―日本とシンガポールの比較―
 涌井 恵 クール・ジャパン ―日本の新たな文化の力―

大辻千恵子ゼミ

- 石井敦子 コンビニ弁当から見える日本の食 ―大量輸入から大量廃棄―
 小山由美 落ちこぼれを作らない ―フィンランドの教育から見える展望―
 近藤穂波 母性愛神話からの解放 ―自分らしく生きる―
 佐藤和枝 スペイン・モンドragon協同組合による労働の連帯 ―人間性の解放の実践―
 森谷亮太 高柳泰世による石原式日本色盲検査表の克服 ―『色覚障がい者』の誕生とその再生産―

大森一輝ゼミ

- 安達裕也 西日本の暴力文化
 荒木奈奈 日本のソフトパワー外交 ―ブラジルにおける日本ポップカルチャーの受容を例に―
 伊藤良倫 エスペラントについて
 岩田量自 音楽の供給者と受容者の関係の在り方

―CDが売れない＝音楽不況＝音楽衰退なのか―

- 尾崎万奈 博物館展示のあり方
 串田訓子 ファーストフード市場
 齋藤詩織 新しいディズニーの見方
 土田優実 ネイティブ・アメリカンの言語復興
 寺田奈未 日本独自に発展してきた文化 ―結婚式―
 丹羽倫子 ベジタリアンとは
 藤木 愛 アメリカ南部 ―南部の人々の文化―
 藤原佑太 アメリカにおける肥満問題とその対策
 古河 一 海外の日本のマンガ ―なぜ日本のマンガに惹かれるのか―

笠原十九司ゼミ

- 伊藤 剣 Cultural Differences and Social Harmony
 蟹谷 泉 戦争責任 ―天皇制と民衆―
 金良 要 文化のもたらす日韓への影響
 平あゆみ 黒人国家ハイチ ―その歴史と現在―
 千葉奈津子 戦時中の日本語教育について ―日本が行った強制教育の真実―
 知花達哉 沖縄戦の集団自決は日本軍の強制のもとでおこなわれたのか
 船津良介 多民族多言語社会における言語政策の在り方 ―シンガポールとマレーシアの比較―
 朴 叡月 日本と中国における朝鮮人の比較
 本間 結 日中国交正常化が両国に与えた影響
 三井田麻帆 台湾女性史
 横山敏紀 東欧の外交と展望

岸 清香ゼミ

- 小故島弘善 連帯するエスニック・メディア ―集団間対話を促進するNAMの取り組みを事例に―
 小篠雪乃 演出される文化とまちづくり ―長崎ランタンフェスティバルを例に―
 恩田真弓 市民主体の多文化共生は可能か ―豊田市国際交流協会(TIA)「ナショナルデー」を例に―
 加藤あゆみ SUSHI プームと日本人 ―「東京・元気寿司 DINIG BAR」成立と展開―
 金澤愛美 仏像と美術 ―信州善光寺における高村光雲の仁王像制作を手がかりに―
 金子りお 創出される「異国情緒」 ―ドラマ『風見鶏』と神戸市北野町の景観形成―
 河野彩音 ヒップホップは「地方」を語る ―stillchimiya と山梨の未来―
 関真奈美 映画による文化観光戦略 ―姫路フィルムコミッションとドラマの街づくり―
 竹田新菜 視覚化された権力 ―シェーンブルン宮殿における劇場的空間の演出―
 松本裕典 日本語教育による地域共生 ―浜松市外国人学習支援センターを事例として―
 丸山裕美子 戦後日本におけるクラシック音楽啓蒙 ―黛敏郎による「題名のない音楽会」の終焉とその遺産―
 村田良平 英語の需要と供給 ―「国際化」時代の英会話学校 AEON の設立と展開―

卒業論文一覧・比較文化学科

森 弘平 音楽で繋がる世代と地域 ―おやじバンドの可能性と限界―
 萬屋 渉 村上春樹現象 ―80年代女性雑誌を刺激する講談社の販売戦略―
 新田杏里 「草食男子」・ジェンダー

重富恵子ゼミ

川崎 倫 キンパリープロセスにおける議論の変化とその要因に関する考察
 佐藤裕野 児童の権利に関する条約遵守の限界に関する考察
 手代木香織 読書と豊かな人間性とは
 中村ジナリン 世界史教科書にみるパレスチナ問題理解の実態
 林 祥吾 高校の普通教科「情報」の問題点
 原小百合 「ニート」のアイデンティティ形成に関する一考察
 原田 望 環境保全型農業推進政策と農家の負担
 藤田早紀 フィリピンの子童労働者支援
 安川知寿 企業の社会的責任から見た「貧困ビジネス」
 山越将貴 生活環境主義の意義

鳥居明雄ゼミ

熊谷由望 異文化批判の問題構成 ―日本における捕鯨文化を中心に―
 山口裕美子 「水」を通してみる日本庭園
 谷吉 萌 世界遺産と富士山 ―国内遺産から見る富士山の世界遺産登録実現可能性と妥当性―
 川越誠広 剣道の歴史 ―時代と共に変化を遂げる剣道―
 竹内理恵 『赤毛のアン』の世界と日本
 田子温美 中世の都 ―紀行文学における東下りの視点から―

邊 英浩ゼミ

金 蘭 韓流ブーム ―『冬のソナタ』から韓国のイメージ変化まで―
 正田歩惟 日本、妖怪ブームの変遷
 裴 炯順 在日韓国人のアイデンティティ

福田誠治ゼミ

有井一博 WTO体制以降のアメリカ農業にみる世界農業
 五十嵐口二一 魔法とは何か
 上杉美樹 多文化主義国カナダにおける移民政策
 大滝めぐみ 日本における外国人児童の教育 ―群馬県の取り組みを中心に―
 小山明日奈 哲学にみる「自己」の探求
 坂井望美 フィンランドの教育から学ぶもの
 長屋七恵 北欧に学ぶ!! フォルケホイスコーレってなに?
 日比野美穂 フランスの食文化
 本間唯子 国際協力において必要な力とは ―日本人としての個人能力―
 三宅智己 イギリスにおける英語の様々な形、方言

村井 悠 韓国における競争教育の実態と学歴の影響
 力 ―フィンランドにおける非競争教育との比較を通して―
 吉田千紘 インバウンドツーリズムの可能性

分田順子ゼミ

酒井菜央 「日本に抑圧家族が多い」は本当か? ―日本の抑圧家族とロジャーズ家族を比較する―
 高橋遼太 なぜ戦争は起きるのか ―旧ユーゴスラヴィア紛争を通して―
 滝口弥生 高知県の復権を目指して ―農林業政策と地域の協同の関係を探る―
 土屋徳満 日雇い労働者の街、釜ヶ崎 ―ホームレスは自己責任か―
 前田美穂 沈黙を破る ―加害を証言するイスラエル元軍人―
 三浦まどか 共生のまち、川崎市 ―国際理解教育と地域国際化に着目して―
 三嶋あかね 社会派広告の光と影 ―90年代ベネトンのキャンペーン後の新しい広告の可能性とは―
 望月裕可 紛争地の子どもの権利を守りには 北部ウガンダ紛争における子ども兵問題から考察する

山本芳美ゼミ

落合知美 映画『空気人形』論
 石川 翠 日本人が創り出すディズニーランド ―東京ディズニーランドにおける異国文化の受容と創造される日本文化―
 伊藤秋世 明治における西洋料理との出会いからみる西洋文化の受容
 稲元千里 近年メディアから見る『血液型』信仰とブーム
 佐藤由佳 ファッションとの関わり方 ―人はどのように服を選んでいるか―
 杉山未貴 女性から発せられるケガレと力 ―たたら製鉄集団内の生活における女性達を中心に―
 田中佐和美 『一人酒』はなにと向き合っているのか ―飲酒文化の変遷から―
 千葉真希 日本における世界遺産登録とその課題 ―『平泉ショック』の事例から―
 坂内彩夏 女性器切除 ―スーダン人女性のアイデンティティを中心に―
 林実可子 日本における婚連衣裳の変遷 ―白に象徴される意味―
 平井未紗 大河ドラマと観光振興 ―“武田信玄”を観光資源として活用している山梨県の事例から―
 山田彩乃 コルセット衰退の歴史から見る女性の美的感覚の変容 ―消失しなかった『身体造形』―

研究論文・修士論文 — 文学専攻科・大学院文学研究科

文学専攻科

佐藤 隆先生

遠藤高英 「競争」から「共生」の学びへ —オランダの教育に学ぶ—

小山雅法 教師の力量形成について

堀部久美子 道徳指導におけるねらいの吟味と発問の工夫

西村知穂 子どもの意欲を引き出す「書くこと」についての指導

松尾 英 学校に求められるもの —地域のスポーツ少年団への聞き取りを通して—

山口紗絵子 日本の小学校の理科教育における生物教材の取り扱い —フィンランドの事例と比較して—

寺川宏之先生

小田和恵 算数教育における、数学的な「読み書き能力」

藤本 恵先生

貝原俊輔 小学校図書室に潜むライトノベル —都留市内小学校図書事務へのインタビューから—

大学院文学研究科

国文学専攻

牛山 恵先生

望月理子 国語教育と人権

渡邊 愛 現代児童文学における「場」が持つ役割とは —「田舎」訪問の児童文学を中心に—

楠元六男先生

郷田敦子 大高源吾『丁丑紀行』について

英語英米文学専攻

儀部直樹先生

稲葉昭一 Children's Journey To Live Through —From Maurice Sendak's Trilogy: *Where the Wild Things Are*, *In the Night Kitchen* and *Outside Over There*—

竹島達也先生

井上舞子 A Consideration on Social Changes in the 1960's Through American Plays

濱谷エロイス先生

大久保祐樹 The Structure of Japanese Nominals with a Prenominal Numeral Quantifier: Distinction between QNC Type and Q-no-NC Type

藤巻由佳 Effects of Vocabulary Learning

Strategy Instruction on One High School Student

社会学地域社会研究専攻

野畑真理子先生

朴 曉星 韓国の女性労働問題

畑 潤先生

白戸溪子 なぜ森で保育活動が行われるのか —「森のようちえん」を対象に、保育者と園児の関わりから見える幼児教育の課題に関する考察—

前田昭彦先生

相澤翔平 まちづくりワークショップにおける各主体の役割像 —ファシリテーターへのインタビューからの再考—

比較文化専攻

伊香俊哉先生

栄 翌 個々人の間における騒音問題と身体

曾 琴 現代中国漢民族の祖先祭祀 —湖南省の二大祭祀行事を事例として—

李 宏飛 21世紀の日中関係に見るメディア報道とナショナリズム —東アジア共同体形成への展望と関連させて—

福田誠治先生

吉津知見 捕鯨について考える

臨床教育実践専攻

高田理孝先生

宮寄憲太郎 大学生の被援助志向性に関する一考察

小林亮介 学校規模による心理的距離に関する一研究

田中昌弥先生

北浦貴之 子どもとおとなの共同による「子ども時代」の恢復 —檜山の教師・中山晴生の「ふるさと学習」実践の検討—

中村知佳 高校生の人生イメージの聴き取りから見えるもの —発達援助職としての教師の在り方—

森 博俊先生

志村麻奈美 ある小学校美術教師の絵本づくりの実践とライフヒストリー —今日における教育実践の質と教師像を考えるために—

吉田 温 障害者のいる家族のダイナミズムと家族が担う役割についての考察 —きょうだいの語りの視点を通して—

講演会だより

地域交流研究センター・都留市社会福祉協議会共催 第7回地域交流研究フォーラム

「第7回地域交流研究フォーラム」の開催

ー ボランティアの力が地域を変える ー

「文大ボランティアひろば」からの新プロジェクト誕生

平成20年6月に、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いによって生まれた『都留文科大学ボランティアひろば（通称：ボラひろ）』も、毎月第4水曜日の夜間（18:15～20:30）、多くの学生と市民の方々が集まり、ボランティアにおける情報交換の場として、精力的な活動を続けています。

この「ボラひろ」から、平成22年10月には、これまで培ってきた活動を軸に、新たなプロジェクト、『いこいのひろば』が誕生しました。このプロジェクトは、18歳以上の知的障がいのある人たちと一緒に、クラブ活動や多彩なプログラムを通して、楽しく一日を過ごし、『障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちが楽しく充実して過ごせる地域づくり』を目的に、毎月第3日曜日に、「いきいきプラザ都留」で開催しています。企画・運営に関しては、学生だけでなく、市民ボランティアもスタッフとして参加し、事業企画書を作成することにより、「いこいのひろば実行委員会」として運営するプロジェクトです。



「第7回地域交流研究フォーラム」の開催

「ボランティア」を通じた交流も3年目を迎え、更に地域に根差したボランティア活動を目指し、今、改めて、その意義、現状、将来について考える一つの場として、平成23年1月30日（日）に第7回地域交流研究フォーラムを開催しました。このフォーラムは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との共同主催ということで、新たなスタートを切る機会ともなりました。基調講演では、地域福祉分野での我が国における第一人者であります、大橋謙策先生に『ボランティアが地域を変える』と題して、福祉社会における歴史と現

状、ボランティア活動について、そして地域の再生・活性化へ向けての分かりやすいお話を頂きました。

大橋先生の講演を聴くために、県内各地から社会福祉関係者が都留に集い、その経験を裏付けとした情熱的なお話には多くの方々が感銘を受けたようです。一例として、参加者の感想を紹介します。

・国家に何をしてもらいたいかでなく、われわれは何をしてあげられるか、この考え方、改めて自覚しました。「博愛」についても、自分の身の回りから子どもに孫に、近隣の人たちに少しづ

つでも及ぼしていけたらと思います。展示もすばらしく、歌も間にはさみ、全体的にとっても飽きさせず良いフォーラムでした。ありがとうございました。

（南アルプス市 70代）

・大橋先生はともかく、学生さん（大学）と社協の話し合いによって生まれた「文大ボランティアひろば」からこうしたフォーラムは大変うれしい事です。学生（若者）の活動を支援したいです。

（都留市 60代）

・ボランティアは継続が大切、月1回、年1回でも30人いれば1カ月、365人いれば年間活動が出来るとお話し、今まで気がつきませんでした。暇が無いからという事は理由になら

地域交流研究センター・都留市社会福祉協議会共催 第7回地域交流研究フォーラム

ない。やる気だと思いました。誰でも何かが出来たのではと思いました。

(都留市 70 代)

- ・ボランティアに携わって2年が経過しましたが、本当にまだ微力ですが、応援しながら自身の勉強もしていきたいと思っています。本日の講演をとってもゆったりとした気分で聴けました。地域の方とも連携を取り活動に参加しようと思いました。(都留市 50 代)



ここで、一息を入れてもらいましょうということで、学生アカペラサークルみつぼしの中のグループ「ぽんかん」により、美しいハーモニーを披露して頂き、後半の報告

に向けての良い息抜きになったようです。

事例発表・活動報告では、「ボランティアひろば」、「都留市ボランティア連絡会」、「都留市まちづくり市民活動支援センター」の三団体から日頃の活動状況等、配布した資料を基に紹介して頂きました。ただ、市民を始め、地域の方々には、これら3団体の存在はあまり認知されていないというのが実情であり、今後の広報活動に対しても、課題が提示されたような気がします。

午後のプログラムでは、1時半から2時間、毎月実施している「いこいのひろば」でのクラブ活動の特別版プログラムとして、4つのクラブ活動を体験してもらいました。

- ・「パティシエクラブ」【コアブラウニー作り】1号館調理室(担当:内田哲也)
- ・「レク・スポーツクラブ」【巨大大カルタ・ソフトバレー】



体育館(担当:下平佳樹)

- ・「音楽クラブ」【手作り楽器製作・演奏】2101 教室(担当:中村香奈)
- ・「チャレンジクラブ」【ラッピンング】2102 教室(担当:上原幸子)

参加者は、午前の部のプログラムを中心に、山梨県内市町村の福祉関係者を始め、220 名もの方々が出席して下さい、盛大に開催する事が出来ました。また、県立桂高校の J R C クラブから 3 名が、ボランティアスタッフとして参加してくれたことは、新たな交流の芽吹きを予感できる大きな成果であると実感できました。今回のフォーラムは、都留文科大学地域交流研究センターが、都留市社会福祉協議会との共同主催ということで開催出来た事に大きな意義を感じました。更に地域とともに「ボランティア」をキーワードにして前進していくことの大切さを認識したフォーラムであったと実感しました。

(地域交流研究センター
杉本 光司)

講師紹介



大橋 謙策

日本社会事業大学大学院特任教授
東北福祉大学大学院特任教授
日本地域福祉研究所理事長
日本社会事業大学学長
(平成 17 年 4 月～22 年 3 月)

講演会だより 都留文科大学 社会学科・地域社会学会共催 2010年度後期講演会

都留文科大学 社会学科・地域社会学会共催
2010年度後期講演会に参加して

現代日本の裁判制度をどうするべきか ——冤罪弁護の経験から考える

都留文科大学社会学科・地域社会学会共催の2010年度後期講演会は、1月26日（水）午後5時過ぎから2号館2101教室にて、「現代日本の裁判制度をどうするべきか——冤罪弁護の経験から考える」と題し、今村核さん（弁護士）を講師として行われ、百人弱の学生たちが熱心に聞き入りました。

裁判員制度が2009年から施行され、裁判への一般市民の参加が始まりました。こうしたなか、今村さんは、冤罪事件や労働事件などを多く担当され、裁判では7件の逆転無罪判決を勝ち取ってこられました。周防正行監督の映画『それでもボクはやってない』の弁護士のモデルとなった方で、ご著書に『冤罪弁護士』（旬報社、2007年）などがあります。

講演では、冤罪が起こる制

度的背景として、第一に警察による「虚偽自白」（嘘の自白の強要）について、みずからが担当された高井戸放火事件などを例に指摘されました。容疑者に対して、逮捕令状なしの任意捜査であるにもかかわらず、連日10時間を超える取調べが行われ、逮捕されると代用監獄（いわゆる留置所）でまた23日間の取調べが行われるため、容疑者がその圧力に耐え切れず、虚偽自白が発生する点が強調されました。第二に、江戸時代の「お白洲裁判」以来これまでの日本の刑事司法では、科学的捜査に基づく物証よりも、以上のように警察主導で作成されたきわめて具体的で迫真性が高い供述調書（自白）が、起訴・裁判での中心的な証拠となり、裁判官もこれを信用しがちであるという問題点が指摘されました。警察・検察が証拠の

偽造を行う例も紹介されました。第三に、無罪判決を多く出す裁判官の昇進が遅れるという司法人事システムの問題点も指摘されました。

その結果、起訴されると裁判で有罪となる確率は99.9%であり、冤罪事件で無罪を勝ち取ることはきわめて困難で、勝ち取れても長期の裁判になることが指摘されました。

裁判員制度が導入されて、確かに「疑わしきは被告人の利益に」という精神に則った良い判決も出ていますが、最高裁判所が裁判員に負担をかけないために裁判を短期化することを強調しているため、いま以上に供述調書中心の裁判になるおそれもある点を、今村さんは強調されました。そこで裁判員制度を改革するために、①裁判員制度の目的を「市民参加により冤罪を減らすこと」に改める、②警察・検察の取調べの可視化（全部録画録音）、③裁判前の証拠整理の段階で証拠をすべて提出する、④裁判員は判決後、評議の内容について自由に発言できるようにする、⑤裁判員が加わった一審判決でも高裁（二審）で無罪の場合は破棄できるようにする、という提言を述べられました。質疑応答も活発に行われました。「実体験に基づいたリアルな講演でとてもためになった」「もし自分が裁判員に選ばれたら、積極的に参加し、制度改善のために役立ちたい」といった感想も寄せられました。

講師紹介



今村 核（いまむら・かく）

1962年生まれ。東京大学法学部卒業。
1992年弁護士登録（第二東京弁護士会所属）。
冤罪事件、労働事件のほか、群馬司法書士会事件、保土ヶ谷放置死事件などを担当。現在、自由法曹団司法問題委員会委員長。

講演会だより

比較文化学科・比較文化学会共催講演会

紙谷威廣先生

キリシタン信仰が日本に残した文化遺産
——五島列島カトリック教会群とその背景

梯 知世、小坂直生、柄澤美有紀

2010 年 7 月 14 日、三号館二階ホールにて非常勤講師・紙谷威廣先生が約三時間にわたって「キリシタン信仰が日本に残した文化遺産——五島列島カトリック教会群とその背景——」という題のもと、紙谷先生が行ってきたキリシタン研究と民俗学を交えて、キリシタン信仰の歴史の中でどのようにして文化遺産が生み出されてきたか、講義を行ってくださった。

紙谷先生は、長崎ではカトリックとのつながりが深い地域であるとおっしゃった。その理由として三つの事例が挙げられる。一つめとして、カトリック教会は全国に 1008 件ほどあるが、そのうちの 133 件は長崎にあること。二つ目として、ほかの地域ではキリスト教人口が全体の 0.3

パーセントなのに対し、長崎の 4 パーセントの人口がキリスト教徒であること。三つめとして、長崎では生まれた直後に洗礼を受けるものが群を抜いて多いことが挙げられる。

次に紙谷先生は、長崎のキリシタン信仰は次の三つの区分に分けて説明できるとおっしゃられた。一つは、初期布教時代のキリシタン。二つ目に、弾圧と鎖国の下での潜伏キリシタン。三つめに、カトリック再布教時代と隠れキリシタンである。

初期布教時代にカトリックは広まったが、弾圧と鎖国の下で新たなキリシタン文化を生み出した。キリシタンと

れないように編み出された信仰の手段として発展した、歌ミサや聖画、日繰り、オラショなどがそれである。そういった文化は生活にも及んでいる。その例として、復活祭やキリシタンの神話が移動祝日や天地始まりのことという名前に変わって生活に取り入れられたことが挙げられる。その中に、終末論的世界観と救済への願望が見られる。



講演会の後に行われた、紙谷先生との懇親会の様子

鎖国の時代が終わりを迎えると、キリシタンに対する弾圧が進み、厳しい拷問・尋問が行われていった。しかしその一方、再布教が始まると同時にカトリック教会が再建され始めた。この時以降に建てられた教会が、現在も日本に残る文化遺産なのである。

最後に、紙谷先生は「キリシタン信仰は、キリスト教と日本文化を融合させ新しい文化を生み出したものである」とまとめている。

講師紹介



紙谷 威廣(かみや・たけひろ)

1944 年生まれ。
1994 年より東京女子立正短期大学・現代コミュニケーション学科の教授を務める。
現在は宗教学、日本史、文化人類学・民俗学の分野で活躍。
著書は『キリシタンの神話的世界』ほか 14 作。文献は『伊勢信仰の定着について』ほか 17 件を発表。

講演会だより 都留文科大学大学院 文学研究科 英語英米文学専攻主催講演会

バックハウス氏の講演

日本の多言語化

—東京の言語景観を見る

戸倉健太郎・久保田琴乃

(大学院 文学研究科 英語英米文学専攻1年)



去る2010年12月15日(水)、早稲田大学教育学部英語英文学科専任講師のPeter Backhaus博士をお招きして講演会が開催されました。Backhaus博士は、ドイツのデュースブルグエッセン大学で博士号を取得され、社会言語学、言語変化、会話分析、文字・表記を専門に研究されており、このたびは「東京の言語景観を事例とした日本の多言語化」について講演をしていただきました。講演会場(1号館305教室)には言語・文学分野などを問わず、多くの学生にご参加いただき、講師と熱心かつ活発な議論を展開することができました。

講演では、我々の身の回りにもよく見受けられる信号の標識や、ゴミの収容ルールが書かれた看板、店の看板など具体的な事例を写真付きで紹介していただき、これらの物の中で「外国人」も対象に書かれているものはどれくらいあるのかということ、年月や時期の変化をおって比較考察されていました。たとえば、ある時期の標識で「東京」の後に英語で“Tokyo”と書いてあるものがありますが、それは外国人(特に英語が読める人)を対象にしていることが分かります。一方、同時期の他の看板などでは「もえるごみ」と書いてあっても他の

言語表記がないものもあり、それは日本人のみを対象としたもので、外国人には分からない情報であるということが分かります。しかし、数年後にそれらの標識や看板を見ると、日本語、英語で表記されているだけでなく中国語や韓国語でも表記が入っているという興味深い結果が得られた事例をご紹介いただきました。年を経るにつれ、こういったものが多言語で表記をされつつあるようですが、今現在でもまた発展途上のようなようです。

今回の公演は英語で行われましたが、学生の多くがそれにもおじすることなく積極的に理解をし質問をしていて、その姿には「さすが文大生」の一言でした。今回の講演会が無事成功をおさめられましたのもBackhaus博士の分かりやすい講演と受講する学生の熱心さあってこそなのではないのでしょうか。改めて主催者側を代表してBackhaus博士と、ご参加いただいた学生の皆様に厚くご御礼申し上げます。



講演会だより

都留文科大学大学院 文学研究科主催講演会

江戸文化の再現

—タイモン・スクリーチ氏の講演会が行われる

窪田憲子

(大学院 文学研究科 英語英米文学専攻教授)

今年度の大学院全体の学術講演会として、現代の代表的な日本学者（ジャパノロジスト）タイモン・スクリーチ博士をお招きしました。スク



リーチ氏はオックスフォード大学で東洋学を学ばれ、その後ハーヴァード大学で博士号を取得されました。現在は、東洋研究として世界的に著名なロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）の教授を務めるほか、多摩美術大学の客員教授もしていらっしゃいます。

スクリーチ氏は、今までに多くの著書を出され、『大江戸異人往来』、『大江戸視覚革命——十八世紀日本の西洋科学と民衆文化』、『定信お見通し——寛政視覚改革の治世学』、『江戸の英吉利熱——ロンドン橋とロンドン時計』、『江戸の思考空間』、『江戸の大普請——徳川都市計画の

詩学』など数々の翻訳も出版されています。鎖国していた日本なのに、江戸に外国人が来るがあった、イギリスの品を愛好する日本人がいた、などスクリーチ氏は奇抜ともいえる発想を、丁寧な実証的分析により裏付けていき、江戸文化に新しい光を当てる数々の研究をされています。

本学での講演のタイトルは、‘The Trip to the Yoshiwara’でした。江戸時代に遊郭として名を馳せていた吉原については、浮世絵でさまざまに扱われていますが、スクリーチ氏は、まず、当時の多くの一般男性にとって吉原は誰でも行ける場所ではなく、行くことを夢見る場所であり、吉原を描く浮世絵には、そのような男性の吉原願望を満足させてくれる意味があったと、指摘されました。さらに、吉原が当時の江戸においては郊外とも言えるべき

区画に位置しており、吉原に行くまでが一つの旅であり、その過程において人に生や死などの人生の局面を経験させている、という興味深い指摘をされました。画像をふんだんに駆使し、当時の地勢や、吉原までの船旅の様子、当時使用されていた猪牙（ちょぎ）舟という高速艇のことなどを詳しく説明してくださり、聴衆はまるで江戸時代を旅しているかのように講演に引き込まれていきました。〈吉原幻想〉と言ってよいような文化的な事象が氏の講演によって明らかにされたと思われます。

講演後の質問も活発で、「吉原で働かされていた女性の悲惨な状況をどう考えるのですか」という鋭い質問もありました。氏はそれに対しても当時の実際の状況を把握していた上での吉原の一つの側面をあぶり出していることを丁寧に説明されました。大変に刺激的で、かつ外国の文化をどう学び、どう研究していくのか、という点についても示唆に富む講演だったと一同感じいった次第です。



ホームページリニューアルについて

～平成23年1月11日より新しくなりました～

情報センター担当 関戸 章雄



ホームページリニューアルについては、広報委員会、総務企画担当、情報センター担当との間でワーキンググループを立ち上げ、今年度中に更新することを目標に平成21年9月から検討を開始しました。まず最初は、現状における課題を取り上げ、どのような解決方法があるかなどについて話し合いました。

新たな課題

1. 利用しやすいホームページにする
2. 魅力のあるホームページにする
3. 受験生に多くアクセスしてもらえる環境をつくる
4. 最新情報発信技術を取り入れる
5. 英語サイトを構築する

現状における課題

1. 作成・更新するのにホームページの専門知識が必要である
2. 各部署で発生する情報を迅速に更新できない
3. 作成・更新は特定の部署で行っている
4. 常に変化するホームページの技術対応が困難である
5. ページに統一感がない
6. トップページの情報が整理されていない
7. 古い情報がいつまでも更新されない

ホームページをより良いものにするためには、これらの課題を解決することが必要であると考え、さらに下記の項目を追加することとしました。

- ①ユーザーごとのページを作成する
- ②受付機能を充実する
- ③ページ内で動画の再生ができる
- ④デザインを重視する
- ⑤携帯サイトを構築する
- ⑥ブログ機能を取り入れる
- ⑦英語サイトを構築する

これらの課題は、アプリケーションサービスプロバイダが提供するコンテンツマネジメントシステム「以下CMS（※1）」を導入することで解決できるのではないかと考えました。CMSを導入した場合、業者に運営管理を任せることができ、ユーザー（各部署）は専門的な知識を必要とせず更新ができるというメリットがあります。CMSの基本パッケージを導入することで話は進んでいましたが、現在のホームページの動向や他大学のサイトを参考にしながら話し合いを重ねたところ、取り入れなければならない新たな課題が見つかりました。

これらを取り入れることにより、利用しやすく魅力のあるホームページになると判断しました。また、トップページに入学試験情報のコンテンツを充実させ、携帯サイトを構築することにより受験生からのアクセスが増えることも期待しました。これらの内容を踏まえた仕様書を作成し、入札を経て平成22年10月に導入業者が決定しました。業者とは綿密な打ち合わせを行い、特にトップページの構成には多くの時間を費やしました。新しく構築する部分やデータ移行など確認を行いながら作業を行い、およそ3ヶ月間で仕上げることができました。苦勞したところはたくさんありましたが、ホームページリニューアルを計画して

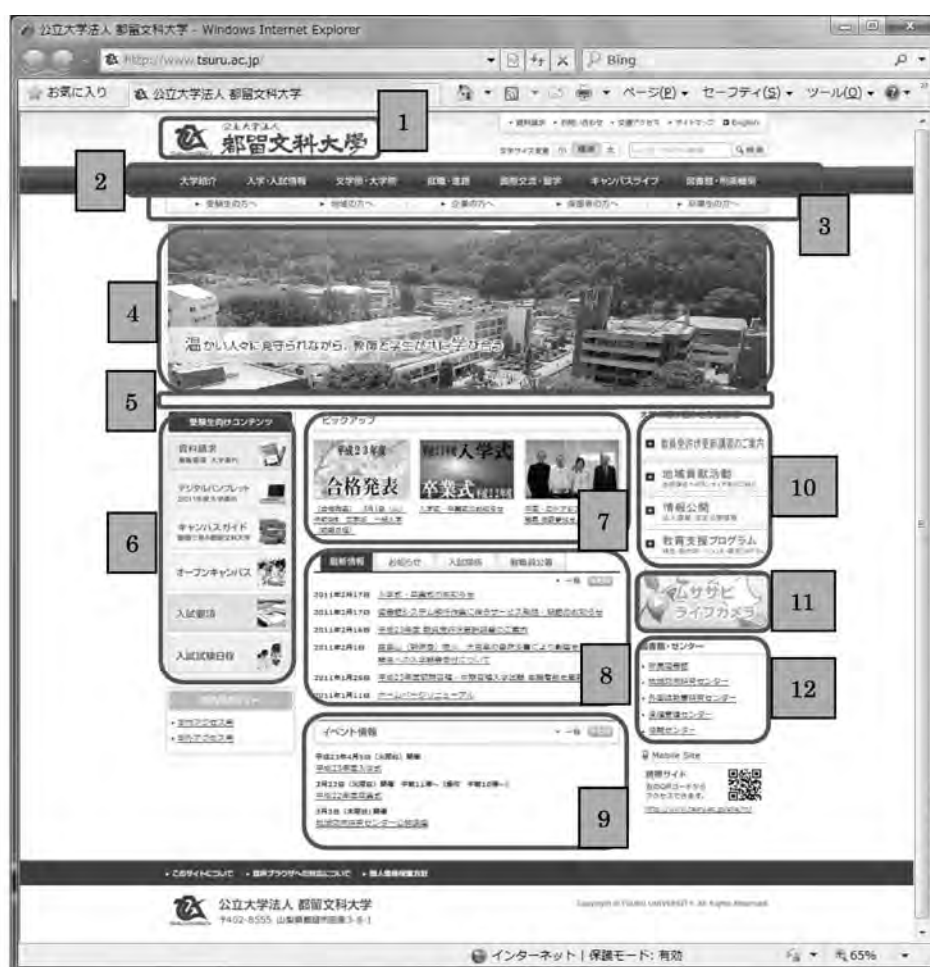
ホームページリニューアルについて

からようやく平成 23 年 1 月 11 日に公開となりました。大きなトラブルもなく無事にリニューアルできましたので良かったと思います。まだ一部の機能（ブログ、英語サイト）が公開されていませんが、準備が出来次第公開する予定です。今後は常に新しい情報を提供していけるよう各部署とも連携して運用していきたいと思っています。

* 1 CMS：ホームページを作成するための専門知識を必要とせず、テキストや画像などの情報を入れていくことで簡単に更新することができる仕組み

ホームページワーキンググループのメンバー

広報委員長	菊池 信輝
広報副委員長	鳥原 正敏
広報委員	重富 恵子
総務企画担当	深澤 祥邦
情報センター担当	関戸 章雄
情報センター担当	大輪 知穂



～新ホームページ～

1 大学ロゴ	7 ピックアップカテゴリー
2 グローバルナビゲーション	8 お知らせ
3 ユーザー毎メニュー	9 イベント
4 イメージ画像	10 大学の取り組み
5 緊急お知らせスペース	11 ムササビライブカメラ
6 受験生向けバナー	12 図書館・センター

文大だより

卒業演奏会を終えて

初等教育学科 音楽専攻4年 田吉 愛美

1月29日、音楽専攻で学ぶ13人にとって大学生活の集大成である卒業演奏会が催されました。

1年生の頃から先輩が演奏をする姿を見て、私も4年生になったらここで歌うんだ…と楽しみで仕方がなかった卒業演奏会。いざ終わってみるとなんだか寂しいです。

高校生の時から声楽と合唱を学んでいましたが、歌うって楽しいと心から思えるようになったのは大学に入学してからでした。

音楽専攻では春と秋に学生主体のコンサートが行われます。所属する学生はそのコンサートに向けて一人一人が一生懸命練習をします。私もお客さんの心に歌が届くようにと毎日のように音楽棟で練習をしました。入学してすぐの春のコンサートでは、伸び伸

びと歌えて気持ち良くて楽しくて、嬉しかったことを今でも覚えています。

しかし、学年が上がるにつれて歌うことが嫌になるようになっていきました。私は「努力をする」「真面目に取り組む」ということが苦手です。周りの仲間が一生懸命に取り組む姿を見て、「努力をしない」「真面目に取り組まない」私は歌うことが本当に好きなのだろうかと自問自答する日々が続き、音楽棟に行くこともやめてしまいました。レッスンも休みがちになり、家に引きこもる日が増えていきました。

そんな私を救ってくれたのは同じ音楽専攻の仲間や所属する合唱団の友達でした。他愛のない会話で私を笑わせたり、食事に誘ってくれたり、ずっと話を聞いてくれ

たり、メールや電話で心配してくれたり……そんな支えや小さな励ましが少しずつ大きくなり、また歌うことが出来るようになり同時に歌に対する姿勢や想いも変わりました。

そして、私は一人で学んでいるのではないと気づかされ、音楽と真摯に向き合う仲間を見て、私も頑張らなきゃとパワーをもらいました。そうやって過ごしてきた音楽専攻での4年間、たくさんのことを乗り越えながら仲間と共に成長することが出来ました。

演奏会で私が歌った曲に『今までもらったたくさんのやさしさ 今まで出会った全ての笑顔』というフレーズがあります。私自身もたくさんやさしさをもらい、たくさんの笑顔に出会えました。熱心にご指導して下さいった先生方、共に学んだ音楽専攻の仲間や同じ目標に向かって突き進んだ合唱団の仲間、友達、遠くから見守ってくれている家族……ここには書ききれないほどの多くの方々との出会いがあったからこそ今の私があります。

今まで出会ってきた方々に感謝をすると同時にこれからの出会いに胸を膨らませて生きていきたいです。そして、『音楽の楽しさ』『仲間の大切さ』『感謝する気持ち』を子ども達に心から伝えられる教師になります。

最後に、今まで出会った全ての人に……本当にありがとうございました。



文大だより

卒業制作展を終えて

初等教育学科 美術専攻 4年 米山 貴史

私たちが所属する初等教育学科美術専攻では、2月7日～2月13日の7日間、コミュニケーションホールのアートシアターにおいて卒業制作展を開催しました。お蔭様で学校関係者、地域住民の皆様を合わせ、452人の方が足を運んで下さり、大成功という形で終えることができました。

今回の展示に向けて、私たちは一年間という期間をかけて作品を制作してきました。それは、教採や就活、そして卒業論文といった、様々なことと平行しての制作であり、簡単なことではありませんでした。しかし、忙しい日々の中、制作しているときは日常では味わえないものづくりという楽しみを味わえました。そして、自己と向き合い、仲間と大切な日々を過ごすことができました。

展覧会に向けて、私たちはゼミ室で長い時間作業を共にするようになりました。美術は個人制作が基本ですが、仲間の存在が大きな力になります。仲間の言葉は、制作の原動力となり、自らのよい点を伸ばすことや課題の発見にも繋がります。一年間の制作を通して仲間と支えあい、

向上しあうことの大切さを実感しました。

技術的な面では未熟なことばかりですが、制作を通じて多くの事を学べたと思います。制作展に向け、各自がこれまでの制作過程を振り返り、得意な分野に取り組んだり、新しいことに挑戦し、四年間の成果を発揮しようと臨みました。

そしてこの制作展は、初めて「展示」を経験する機会でした。作品の大きさに合わせて、鑑賞者が観やすい距離をとれているか、作品の影がどう映るか、他の作品との組み合わせはどうか…など、作品

のよさを引き出すために様々な工夫を凝らし、作品は展示も含めて完成となることを実感できました。

今期中には、沢山のお客様に来て頂き、多くの温かいお言葉を頂きました。自分たちの活動を誰かに観てもらうことは、大切なことだと改めて感じました。作品を観て、制



会場風景

作者のことを知って頂き、さらに何かを感じて頂けたとしたら、それは本当に嬉しいことです。

制作展を成し終えて、学生の今だからこそできることを、存分に楽しむことができたと感じています。

文末ではありますが、本展を御高覧賜りました方々と、御協力頂きました学校関係者、地域の皆様に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



卒業制作版画作品「Lucky」と私

文大だより

都留文科大学音楽教室
コンサートシリーズ No.26小濱妙美ソプラノリサイタル
～世界のディーバが誘う、至福の音楽の旅～

2月1日（火）午後4時40分から音楽研究棟Mホールにおいて、初等教育学科音楽教室主催のソプラノリサイタルが開催されました。

このコンサートは毎年国内外で活躍する声楽家や演奏家の方々を招き本学の学生や一般市民向けに企画しているもので、今年はオペラでディーバ（主役）を務め、国際的に

も活躍している小濱妙美さんを迎え、蝶々婦人の登場シーンに合わせたアリア“ある晴れた日に”など舞台演出と美声を披露しました。

また、この舞台でのピアノ演奏は現在ニューヨークを中心に作曲家兼アレンジャーとしても活躍している姉の小濱良子さんが担当しましたが、コンサート後半では小濱さん

姉妹と同郷で姉の良子さんの同級生でもある本学初等教育学科中井均教授のお話や、妙美さんと大学時代同級生の同学科清水雅彦教授との意外なエピソードなどを紹介するなど、穏やかな雰囲気の中、世界の第一線で活躍する声楽家を身近に感じられるひと時となりました。



ソプラノ歌手：小濱妙美さんと、ピアノ演奏：小濱良子さん



会場の方々とともに熱唱

山梨の魅力メッセンジャー
27名に認定証交付

1月26日（水）本学2号館102教室において、平成22年度山梨の魅力メッセンジャー制度認定証の交付式が加藤祐三学長、泉桂子社会科学准教授など大学関係者の見守る中で開催されました。

山梨県知事からの認定者は、本学の地域学や地域交流研究Ⅲなどの講座や実習を履修し山梨の魅力について学ん

だ27名の全学科学生で、英文学科4年生の中込沙耶さんが代表し山梨県観光部窪田克一次長より同認定証の交付を受けました。

この魅力メッセンジャー制度は、山梨県が県内の大学などに長期滞在する学生を対象に、講義と現地視察を通じて山梨の魅力を学び、卒業後も山梨ファンとして山梨の魅力

を県外に積極的に伝えていくことを目的としており、認定された27名が、今後は県外の実家などに戻った折に本学や山梨の魅力を発信し相互の交流を深める架け橋となることが期待されます。



文大だより

生活環境科学ゼミ都留市地産地消レシピを開発

2月24日本学1号館105実習室において初等教育学科生活環境科学ゼミによる地産地消レシピの調理実習会が開



催されました。

当ゼミの学生は地産地消ができる食材やその調理法などをテーマとして研究開発してきたが、今回は都留市食生活推進員の方々の協力を得て調理過程での問題点や手順の記載方法などを確認する作業が行われました。調理中には料理のベテランである食生活推進員の方々から実際の調理の

際の留意点など様々な助言指導があり、学生たちを感心させる貴重な意見をもらうことができました。

また、今回の地産地消レシピの指導教官である初等教育学科の吉住典子准教授は今年度「食育つる推進市民会議」の会長でもあったことから市内で取れるアオハタ大豆を使った「豆腐キット」作成にも携わり、大学から市内特産物を使った新たな食品の提案を市民に向けて発信していきたいとのことであった。

編集後記

早春の都留にて

中地 幸

平成22年度もいよいよ学期末となりました。社会学科の菊池信輝先生を委員長とする今回の広報委員会は、平成21年度都留文科大学の法人化の年から始まり、法人化特集などを掲載しながら、新しい大学のあり方についての情報も提供してまいりました。学報を通して、大学内のさまざまな動きが見えたかと思います。今谷明学長のもとスタートした法人化でしたが、今谷学長は新体制確立のためのご心労も重なり、ご体調を崩されてしまいました。しかし平成22年7月には、加藤祐三先生が新学長に就任され、大学も法人化2年目を迎えて、学内体制もだんだんと落ち着いてきたように見受けられます。

この春は長年都留にお勤めになられた初等教育学科の山本安夫先生、吉住典子先生、国文学科の加藤静子先生、そして英文学科初のネイティブ・イングリッシュ・スピーカーの濱谷エロイス先生がご退職となります。山本先生とはちょうど新図書館が建設されるときに図書委員会で一緒にしました。まだ工事中の図書館内を視察した時のことがなつかしく思い出されます。吉住先生、加藤先生、濱谷先生とはお食事会などで何度か一緒にさせていただきましたが、教育と研究の両方に惜しみなく力を注がれる姿には、同じ女性教員としてずいぶん啓発されました。濱谷先生は母国語が日本語でないだけに会議など大変だったこともあったかと思いますが、常に細やかな心遣いをしてくださり、頭が下がる思いです。

ところで、来年度は、女性教員が中心となって立ち上げた「ジェンダー研究プログラム」の7周年にあたります。アメリカではフェミニズム運動の中から生まれた学問として「女性学」という言葉へのこだわりが今もあります。都留文科大学ではあえて「ジェンダー研究」という用語を使い、ジェンダーに関わる事象を幅広く考えていこうとしています。平成23年度には、アメリカとデンマークからゲストを招き、記念講演会を開催しようと、現在、委員を中心に企画を進めていますが、大きな国際的企画は今年が初めてですので、皆様のご指導とご鞭撻を仰ぎたいと思っています。

別れの季節である春は少しさびしい気持ちになりますが、どんな極寒の冬を経ても、春になれば木々が確実に芽吹いていく様には、何か力強い生命力が感じられ、励まされる思いがします。景気の低迷が続く、大変厳しい時です。しかし卒業生の皆さんには都留で培った素晴らしい力が潜在しています。その力を発揮する時は今すぐではないかもしれませんが、でもそれは、芽を出し、やがて花を咲かせる時が来ます。卒業生の今後のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

平成 22 年度「学生チャレンジプロジェクト」 による大学紹介DVD完成

今年度の「学生チャレンジプロジェクト」で、社会学科現代社会専攻2年の佐々木大祐さんが中心となり高校生向けの大学紹介DVDを作成しました。

今後は本学オープンキャンパスや高校訪問などの際に、この手作りの大学紹介DVDが活用される見込みですが、閲覧をご希望のかたは附属図書館におい



大学紹介DVD

て学内資料として閲覧できますのでご利用ください。

出版助成金による出版書籍紹介

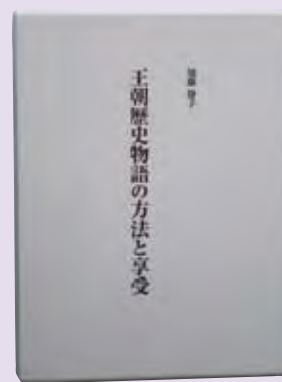
平成 22 年度の都留文科大学出版助成金による出版書籍は、国文学科加藤静子教授の『王朝歴史物語の方法と享受』、同学科古川裕佳准教授の『志賀直哉の〈家庭〉』の下記2作品となりましたので紹介します。



古川裕佳／著
2011年2月
株式会社森話社 3,200円＋税

◇ふるかわゆか 国文学科准教授

志賀直哉の
〈家庭〉
女中・不良・主婦



加藤静子／著
2011年2月
竹林舎 13,200円＋税

◇かとうしずこ 国文学科教授

王朝歴史物語の方法と享受

本 ぶんだい堂



進藤 兵 他／編
2010年12月
大月書店 3,800円＋税

◇しんどうひょう 社会学科教授

高度成長の時代2
過熱と揺らぎ



阿毛久芳／編・著
2010年11月
ゆまに書房

◇あもうひさよし 国文学科教授

都市モダンリズム詩誌
都市モダンリズム誌の大河Ⅱ



福田誠治／著
2011年2月
朝日新聞出版 1,500円＋税

◇ふくだせいじ 比較文化学科教授

こうすれば日本も学力世界一
フィンランドから本物の教育を考える